
それゆけ黒騎士くん

ころやん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それゆけ黒騎士くん

【Nコード】

N3749J

【作者名】

ころやん

【あらすじ】

普通の高校生が普通に暮らしていたはずなのに、なんでこんなこととに！？

ひよんな事から非日常へと巻き込まれた主人公。
自分の平穩を勝ち取るため、邁進するのだが…

はじめに

はじめにお断わりをば。

作者のころやんです。

この作品は、ネギまの二次創作です。

ですが、原作崩壊を引き起こしたり、ご都合主義的な展開が多々発生し、気分を害する可能性があります。

それでも「まあ、見てやるか。」と思える方のみてください。

また、作者はこの作品が処女作です。

未熟な表現や言い回し、誤字、脱字がありましたらご報告ください。まだまだ、未熟者なので、「こうすればいいのにな」という風なアドバイスがあればどしどし送ってください。

最後になりましたが、完結を目指して頑張っていきますのでよろしく願います。

小説投稿サイト「Arcadia」にて同じ内容で掲載しています。

第一話 波乱万丈である。(前書き)

最初の数話はどちらの作品にも絡まないですがご容赦を。

第一話 波乱万丈である。

普通の高校生がいつもとかわらない日常を暮らしていた、はずなのに……

なんだってこんなことになってんだ……！？

俺は今モーレッツに混乱している！

何故ならば、今の俺に置かれている状態が、理解の範疇を越えているからだ。

あまりのことに、頭の知恵熱で熱暴走が発生し、処理落ちを起こしそうだ。

「そりゃ、熱暴走してるからね」

ええい！声を出してない地の文に入って来んな！

「あれっ？こんなとこに部品が落ちてる……おっかしいな。全部組みこんだはずんだけどな」

《って、おい！？それ明らかに俺の部品じゃねえの！？なにイラネエとこでドジッコ属性発動してんですか！？》

「ええ、そんなに褒めないですよ（笑）」

《褒めてねえ……！？貶してんだよ！？怒ってんだよ！？つか、なんだ？（笑）ってなんだ！？バカにしてんのか！？》

「ええ、まさか…」

~~~~~

……疲れた…もう疲れた…こんな感じの問答を半日も続けられれば誰だって疲れる。

なんだってこんなことになったんだ？

一体どこで選択を間違えたんだ！？

「回想はいりまゝす。」

《ウゼエ〜〜〜！！？》

あれはいつもと変わらない普段どおりの朝だった。

「いつてきまゝす。」

いつもどおり、遅刻をしない程度で、なおかつ早過ぎない時間に家を出て、学校に向かっていた。

にゃー

「ん？」

その途中、俺が小さいときから住み着いている三毛猫のタマがでてきた。

こいつは、長いこと生きているからか、あまり物怖じしないので有名だった。

「おー、タマ、久しぶり。元気にしてたか？」

なー

「相変わらず、人懐っこいな、おまえ。」  
うなー

そんなタマをひとしきり愛でてから、また学校へと動こうとした。

「そんじゃあな。あんま甘えに行つて攫われんなよ？」  
なー

この時、周りに注意を払ってなかったのが悪かったのだろうか？瞬間、世界が黒に覆われ、強烈な衝撃を受けた俺は気絶し、次に気付いたとき俺は、見知らぬ部屋にいた。  
機械のようなもので出来た体で……

## 第一話 波乱万丈である。(後書き)

み、短いでしょうか？

携帯から書き込んでいるのでどうなのかがさっぱりです。

## 第二話 往々にしてままならないもの。(前書き)

これから長い付き合いになる(予定)の博士との出会いです。  
ちなみに原作にはまだ入ってないです。

## 第二話 往々にしてままならないもの。

体が機械になっていて、まず頭に浮かんだのは、

今北産業！

いつもの朝

タマはいつもかわええなあ

機械の体

→いまここ！

の数行だった。

せーの

《何じゃこりやー！？つーか、なんじゃそりやー！

何でその流れでそうなんだよ！？わけわかんねえよ！？お兄さん、  
びっくりだよ！》

とりあえず混乱した。

それはそうだろう。一度も大きな怪我をしたことのない生身のからだ  
が、気を失って、次起きたときに機械になっていたら、誰でも混  
乱する。

そして、自分の体がどうなっているのか分からなくなったので、確  
認することにした。

《か、鏡！鏡はないか！？全体像を見れそうなやつ！そうじゃなくて  
もいいから！》

「はい。」

《ん？あ、ども。》

そうして、誰かにもらった鏡を覗き込んだ。

そこに映っていたのは、見覚えのある自分の顔ではなく、やはり機械で出来たロボットみたいな顔だった。

ただし、作り掛けなのか、装甲などは付いてなく、歯車やフレームだけであり、いくつものコードで繋がれた姿だった。

その姿に混乱した俺は、もう一度叫ぶことにした。

せーの

《なんじゃ…って誰だあんたー！？》

混乱の極みの中、あまりに自然な流れで鏡を渡されたので気付かなかった。俺の隣にはぼさぼさの長い金髪で、ぽやぽやした印象がある表情の見た感じ14、5才くらいの可愛らしい少女がいた。

その格好は、だぼだぼした私服の上に白衣を羽織るといういかにも研究職の人間が、「めんどくさいから適当に着た」というオーラがそこらかしこから出ていた。

「うん？博士だよ？」

《博士？》

「そうそう。博士。君の今の躰である甲一種第一級機鋼魔神ゼロ号、コードネーム《黒鐵》クロガネ、えーと、君風に簡単に言うなら、あすらまきーな？を作製したアンリ・フォーメッド博士だよ？」

俺は、また混乱したが、逆に冷静になろうとした。

この子の言っていることは、わけのわからんことばかりだ。

だが、ここで混乱してばかりでは何も前に進まない。だから、なぜ

こうなったか知っていきそうなこの子から情報を聞き出すことにした。

《……えーと、色々と質問したいんですが、おーけー?》

「あゝ。おーけー、おーけー。何でも聞いてくださいよ?」

《まず、ここはどこ?》

「ここ?ここは私の研究所だよ?えゝと、細かい地名は忘れたけど、地球だよ?」

…ツツコミたい気分満点だった。そして、この子にたいする情報を修正した。この子はぽやぽやしてるんじゃない。天然なんだ!と。しかし、かまわず次の質問することにした。

《え、えーと…博士って何の博士?》

「うゝんと、お兄さんに分かりやすく、簡単に言つと魔法と科学を融合させる研究をしてる博士だね?普通の大学も出てるし、博士号も持つてるから正式な博士だよ?」

《………》

「どうしたの?」

魔法?今、この子は魔法といったか?ここは黄色の救急車を呼ぶべきなのだろうか?それともスルーするべきかと悩んでいると…

「あ、そっかゝ、お兄さんは裏の人じゃないから、そこも説明するよ?」

《うら？浦？裏？》

「うん。裏。魔法って基本的に秘匿するものだから、普通に生活してる分には関わらないの。だから、お兄さんが知らなくても普通だよ?。」

《へえゝ、へえゝ…》

ここまで「常識だよ?。」といわんばかりに言われると、はぐらかされてるのか?と思い、少しイラッときたのは内緒だ。

「むうゝ?その反応は信じてないな?お兄さん?。」

《そりゃあ、ねえ?》

自分の言葉が信じてもらえないのがお気に召さないのか、不機嫌そうに頬を膨らませるが、見かけと相まって可愛いだけである。

そんな感じにほほえましく眺めていると、彼女はうつむきブツブツと呟きはじめた。

どうしたんだろうか?少し反応がおざなり過ぎたか?と思っていると、何もない彼女の手から火炎放射機でも使ったような火が伸びた。

《うおお!?!なんじゃそりゃあ!?!》

「これで信じる気になった?本当はライター程度の火なんだけど派手さ重視で大奮発だよ?。」

《お、おお。魔法ってあるんだな…》

正直なところ手品か？とも思ったが、タネがあるようにも見えないし、手品を魔法と誤魔化すのはこの子には出来ないように見える。万が一の確立に、手品を魔法と思い込んで覚えてる可能性があるが、この際、話を円滑に進めるために除外しておこう。

「ん」。お兄さん、まだ完璧に信じてないって雰囲気をするよ？」

《そ、そうか？気のせいだと思うぞ？》

……天然でもそんなに鈍いわけでも無いようだ。

「む」？」

《つ、次行こう、次。

次は、この軀を甲一種なんたら、って呼んでたのは？》

「あゝ、なるほど。そうだよなゝゝ、いきなり機鋼魔神とか、分類分けで呼ばれてもわかんないよねゝ？」

《うんうん。》

なんとか誤魔化せたようだ。

「えーと、それじゃあ説明します。機鋼魔神というのは、さっき言ったように科学と魔法を掛け合わせて作ったロボットみたいなものだよ？まあ、厳密には違うんだけど……細かいことは、置いとくね？僕の研究の集大成でもあるね。」

《ふむふむ。（ボクっこだったのか……）》

「分類分けは、一番大きな分類に丙、甲、乙があります。丙は粗悪品などで作った概要品、つまりはガラクタで作ったエスキスだね？次に、甲はある程度完成した作品、試作品のことをさします。最後に、乙は完成した作品、市場とかに出回るもの事になるかな？ここまでは、おーけー？」

《おーけー。おーけー。》

「よろしい。次に、種別は用途分けだね？一種は汎用、二種は水中用とかってかんじに。」

《ほあゝ》

「それで最後に級等は一級と二級の二つがあつて、これが付くのは甲と乙だけ。一級はオーダーメイドを二級は量産品のことを意味するんだね？」

《なるほどなあゝ。》

つまり俺はオーダーメイド製汎用機鋼魔神ってわけだ。》

「そうなるね？よくできました。ぱちぱち。」

《うわーい、アリガトウー。》

棒読みだった。俺がここまで色々と関係の無いことを質問していたのは、ひとえに心の準備が出来なかったからである。

俺が、このような躰になつてしまった理由はわからないし、元の体がどうなったかもわからない。

しかし、並の事では無いのはわかる。

そうなると、元の体に戻れない可能性も考えられる。そう考えたと

き、この質問をするのは躊躇った。

しかし、もう他に質問することも少なくなり、俺には「このまま体のことを聞かずに終わらせる」か「ここで体のことを聞くか」の二択を選択する時に差し掛かっていた。

「ふふふ。」

そんな焦っている中、彼女は何故かご機嫌だった。

俺はそれを不思議に思い聞いてみた。

《何でそんなに楽しそうなんだ？》

「うん？楽しそう？」

《うん。楽しそう。》

「うーん？それは、やっぱりこんなに普通にお喋りしたのが、久しぶりだからかな？」

《久しぶり？》

「うん。大学に通ってたときも友達いなかったし、出てからもできなくって…えへへ…」

それまで、少女は一人だった。

普通の人とは違い、早熟だった彼女は周りから敬遠されていた。それはいつまでも変わらず、結果彼女は他人とどう接すれば良いのか、友達とはどう作ればいいのか、わからなかった。

《…なら、今から俺が友達だ。》

「へ？」

《お、俺が友達に成ってやるって言うてんだよ。》

気付いたらそう言ってた。

何故か、この子が寂しそうに笑うのを見たくない。そう思ったからだ。

そして、肝心の彼女は戸惑っていた。

「え？え？い、いいの？僕、まだ合ったばかりで、お兄さんのこと詳しく知らないよ？」

《そんな細けえこたぁいいんだよ。俺なんか、お前の事なんか全然知らねえぞ？

それとも、何か？嫌か？》

「い、嫌じゃないよ！？ただ…」

《ただ…？》

「友達になるの…初めてで…どうしたらいいんだろうって…」

《そんなもん簡単だ。》

「ホント？」

《おう。友達になりたい相手見つけて、「友達になってください。」これ言って、相手が同意したら、友達だ。》

「そうなんだ…」

《そうなんです。》

「……お兄さん。」

《おう？》

「ぼ、ぼくと、と、友達に、な、なつてくだ、さい……！」

《おう！変な体になつちまっているが、よろしくな！》

「はい！…うん？」

《どした？》

「変な体といえば、お兄さんの体はもう無いですよ？」

《…なんですと？》

衝撃的過ぎる一言で、色々台無しである。

もう、さっきまでの初々しい空気と、信じたくない真実を聞くため費やした時間は、どこかへ消え去ってしまった。

「だから、お兄さんの体は、その機鋼魔神の材料の一つになつてますよ、って？」

《ほわい！…り、りあり〜？》

「びこーず、ゆあー、ぼでい、だいど、びこーず、おぶ、えくすぺ

りめんど。しゅあり〜?」

《おゝまいがっ……（拝啓、皆様方。どうやら俺は何かの実験の  
ばっちりを受け、死んだところをロボットの材料にされたようです。  
）》

今まで、懸命に冷静に努めてきた俺だが、あまりのショックに蓄め  
ていた物を解放することにした。  
つまり…

《な、な、な…》

「ななな？」

《何で何だあー！!?》

その叫びは十数年の短い人生のなかでもトップスリーに入る絶叫だ  
った。

## 第二話 往々にしてままならないもの。(後書き)

中身がスカスカですみません。次の次に原作前にはいれるかも？

### 第三話 ある意味、不幸な幸運。(前書き)

今回で説明回は終わるはず！自己解釈やオリ設定が多々ありますが  
どうぞ御覧ください。

### 第三話 ある意味、不幸な幸運。

あれから、なんとか落ち着いたが、その代償は多大なエネルギーと大量の時間だった。

《はぁ…》

「お兄さん、落ち着いた？」

《少しは…》

「そう？なら、良かったよ。」

《……》

俺に心配そうに声をかけてはいるが、実際のところ、俺がここまで炎上したのはこの子のせいでもある。

鎮火しそうになったところに、絶妙なタイミングで燃料を投下するので、いつまで経っても火は消えず、酸素がなくなった時点で鎮火したというところだ。

どうなるかは言わずもがなである。

しかも、質が悪いことに、悪意が全くなく、純粹に会話(?)を楽しんでいただけで、本当に心配しているのが分かってしまうことだ。

《(というか、もしこれが演技だったら、トラウマもんだよ…)》

「本当に大丈夫？具合の悪いところが有ったら、調整するよ？」

《あ…》

そこで俺は思い出した。

途中で爆発してしまい、有耶無耶になっていたが、俺が機械の体になつてしまった理由を聞き出せてはいないことに。ここで聞きのがせば、どうなるかわからないので、俺は急いで聞くことにした。

《その体のことについてなんだが…》

「なにになに？」

《何で俺の体が、気が付いたらこの躰になつていたんだ？》

俺が聞いてみると、彼女は手を顎に当て、うんうんと悩みだした。

「…それを話すと長いことになつて、「身内のお恥ずかしい話」を聞かせることになるんだけど、いい？」

どうやら色々と事情がある用だ。しかし、聞かないことには、事は進まないのだから俺は軽く返事をした。

《俺はいいよ。》

「それじゃあ、話すね？」

端的に言つと、お兄さんがその躰になつた理由は、とある実験が原因なの。」

《そういえば、そんな事言つてたな》

「うん。その実験は、超重力発生にともなう空間の歪みを意図的に

引き起こし、世界が一つではないことを証明し、その世界に移動、ないし観測することが目的だったの。」

《…あんだって?》

俺は、あまりに突拍子な発言に目が点になり、言葉を聞き返した。

「順を追って話すね？」

まず大前提に「平行世界」についてだね？それはわかる?」

《ああ。あれだろ?「世界は選択の数だけ存在する」って奴だろ?「シュレディンガーの猫」とか?》

「その通り。よくできました。知ってくれてたら説明が省けて助かるよ。」

《どういたしまして。》

「さらに付け加えるなら、「平行世界」同士には間を阻む、「世界の壁」とでも言うものがあると仮定するよ。」

《了解。》

ここだけの話、俺は軽い漫画、アニメ好きである。（決してオタクではない!）

その中に、「平行世界」という言葉は割と出てくるので知っていたのだ。

もし、イメージするならば、樹系図のようなものである。

「なら、次は重力だね?」

重力というのは、星が中心へとものを引き付ける力なんだ。だから、地球上何処に行っても掛かっている力なんだね？

普段ならどうでもないんだけど、何百、何万倍と掛けると話は違ってくるんだ。

限界を超えた重力をかけられた空間は、すべてを飲み込むんだ。それこそ、音だろうと、光はだろうと、空間だろうと、時間だろうとね？

そうして生み出されものがブラックホールだね？ここまでいい？」

《あ、ああ。なんか漫画とかで聞いたことあるような話だな。つまりは、力づくで「世界の壁」をぶち抜こうとしたんだな？》

「その通り、正解だよ。お兄さん。」

彼女の説明を聞き、俺はある小説を思い出していた。それは、最近のライトノベルで、登場人物の一人が同姓同名だったので見ていたら、ハマっていたものだった。

確か、あの作品でも内容は違ったが、似たような結果をもたらした実験をしていたはずだ。そう考えたとき、今までの事を思い出した。彼女は、俺のことを機鋼魔神と、アスラマキーナと言ってなかったか？字は違うが読みは変わらない。

まさか、あの小説『アスラクライン』の世界か、その平行世界に来ちまったのか！？と思っていたら、彼女に現実へと戻された。

「おーい。お兄さん。次ぎ行っている？」

《ん？ああ！すまん。どうぞ。》

「じゃあ、次行くね？この実験、実はぶっちゃけると最初の段階で挫折してたの。」

《はい？》

「発想までは良かったんだけどね？アプローチがあまりにずさんでね。今は、極大の魔力を用いての手法に切り替わっちゃったんだよね。」

だって、方法が「平行世界はあるに違いない、ブラックホールを作って世界の壁を抜けば、きつと行ける。」だよ？ブラックホールを作って、それをどう処理する？維持の仕方は？平行世界にいける確証は？ってことだよ。」

彼女は、溜め息を吐きながらつらつらと欠点をあげていった。

《ちょっと待て、じゃあ俺は何でそんな実験に巻き込まれたんだ！？》

そう。彼女が言ったとおりなら、その実験は行われず、俺が巻き込まれるはずが無いのだ。

「そこなんだ。そこがさっき言った「身内のお恥ずかしい話」なんだよ。」

《へ？》

「よくある話でね？自分の研究を危険だからって、諦めきれないものなんだよ。人ってのは。おまけにそれが自分の崖っ淵に立たされているときだったら。」

《も、もしかして…？》

俺は、話の流れから嫌なものを感じはじめた。追い詰められた人間は、何をしでかすか分からない。

そして、俺がここにいる。この事実から導きだされる結論は、簡単にわかることだ。

「うん。お兄さんの想像で大体合ってると思うよ？」

納得できない研究者、しかもそれ迄、結果を出せずに自分の地位が危なくなってる人が、自分の理論を証明するために暴走したんだ。」

どうやら、俺が巻き込まれたのは、とある研究者の暴走が原因らしい。

巻き込まれた方としては、堪ったものではなかった。

《けど、手法が変わったってことは、それはある程度認められてるんじゃないのか？》

「ううん。その手法に使う極大魔力の收拾、運用は別の人がやってて、成功しても手柄は折半なんだよ。それで帳消しに出来るほど甘くもなく、プライドも許さなかったんだよ。」

《せ、世知辛え…》

…世界はいつの世も非情であるようだ。

「まあ、はやまったのはいいけれど、設備もない、材料もない、時間もない。そんな状況で成功するはずもなかった…」

《けど、成功したんだな？》

…コクッ

俺が確かめるように問うと、彼女は苦々しく頷いた。

「勿論、無事にと言うわけじゃなくてね？おまけに成功したって言うのは私しか知らないし…次はそこを話すね？」

《わかった。》

どうやら、色々とみそが付き、その内容も声大きく言えたものではないらしい。

少しの間を置いてから彼女は、話を再開した。

「その人は、まずブラックホールを作ろうとした。本人は重力魔法が得意だったんだけど、それを作るには人の魔力はちっぽけ過ぎるんだ。」

「ならばどうする？って悩んだ結果、最低で最悪の選択をしたんだ。」

《…どうしたんだ？》

「爵位級、それも上位階級の悪魔を召喚して、取引をしたんだよ…」

《悪魔？》

「そう、悪魔。召喚すること自体はどうでもないことなんだ。あまり誉められるものじゃないけどね？」

問題はあの人の実力で爵位級を意図して呼び出したことなんだ。」

《なんでなんだ？その爵位級とかは、そんなにとんでもないやつのか？》

今まで、関わりが無かったので、悪魔と言われてもパツと思いつか

なかった。

それも爵位と言われ、貴族かよ。と心の中でツッコミをいれた。

「そうだね。まず、普通の悪魔と爵位級の悪魔で実力の差が激しいね。それに知性も高くなるんだ。」

《ほ。どれくらいになるんだ？チ○パ王と子供○空くらい？》

「んーん。ナ○パと悟○くらい。」

《ひどっ！実力差ひどっ！！》

「爵位級つてのはそれくらいすごいんだよ。その中でも上位階級となるとすごいんだよ。」

分かりやすい（オタク的に）表現を使える彼女にもびっくりだった。

《そ、そーだったのか、その爵位級悪魔つてのが、すごいのはわかったけど、実力以上のを召喚したことがなんで問題なんだ？》

「……通常召喚に必要な物は対象に見合った量の魔力で、依頼の内容、依頼人によって取引の代償は変わってくるんだ。

まあ、大体が好物の魂とか、命の尽きるときの苦悶の表情とか、趣味の悪いものだけだね。」

《…なるほどな、確かに胸くそ悪くなるな。》

そう言った後、実力に合った相手しか召喚出来ないはずなのに、格上の相手を意図的に呼ぶことなど簡単に出来るものかと頭に浮かんだ。

《うん？召喚に魔力が必要なのに、実力以上のを召喚できるのか？》

「そこ、そこなんだよ。今回のことが最悪なのは、そこなんだ。」

《？》

「実は召喚にも裏技があるんだ。それは極めて特殊な術式と、喚ぶのに足り無い分、喚ぶ相手が満足するだけの「あるもの」を捧げること。」

《「あるもの」？ま、まさか！？》

一般的な悪魔のイメージではなく安直な発想をしたがあながち間違いでもなかったようだ。

「…人の命だよ。今回の召喚の為に捧げられた。犠牲者は何十人も及んだんだ。」

《…そうして喚び足された強大な悪魔の力と、自身の魔法で「壁」をこじ開けた、か。》

「そう。けど「壁」を壊すような事をして何の影響もないわけが無かった…はずだったんだけどね？腐っても鯛、って言うのかな？原因はわからないんだけど、大惨事になる前にブラックホールは閉じた。」

残されたのは、使い物にならなくなった研究所何個かと、馬鹿な研究者と数十人に及ぶ一般人の亡骸と、消滅寸前の悪魔だけだね。」

《あれ？俺が生き残ってたんじゃないのか？》

「うん？残ってたよ？」

《え？だって生き残ったのって、結局消えかけの悪魔だけだったんだろ？》

「うん。その悪魔がお兄さんだったんだよ？」

またもや、ぶっちゃけた。

この子は何故こうも、人が大ショックを受けるようなことをあつからかんつと言うのだろうか？天然、恐るべしである。

《はあっ！？俺が悪魔！？》

俺がデビル！？冗談だろ！！？俺は生まれてこの方、親に育ててもらった体をいじくった覚えはないし、人間を辞めたつもりもねええ！！

はっ！しかし、人間を辞めるという言葉に惹かれる部分があるのも、また事実！

石の仮面を被りながらWRYYYYY！！と叫ぶべきか…

いやいや、ここは新世界の神に…》

「弱った悪魔がお兄さんの魂に乗っ取られたのか？それとも同化したのか？細かいことはわからないけど、お兄さんは悪魔になっちゃったんだね。」

《無視された！？》

「暴走した挙げ句、損失だけだと面目が立たないからその悪魔を研究素材にするのに僕が預かったんだ。ん？何か言ってた？」

《…イエ、ナンデモナイデス》

真面目に反応されても困るが、無反応というのも寂しいものだった。

「変なお兄さん？」

預かった悪魔が上位階級だって推測されていたから、そこから有益な情報が期待できるかなって思っ、て、サルベージしようと記憶をのぞいてみたら、ビックリしたよ。

中身は漫画とかアニメの情報満載のお兄さんだったんだもん。しつてるよ？そういうのって「おたく」って言うんだよね？あと、えっちい本はいけないと思うよ？」

《お、お、お、オタクちゃうわ！って、見るな！女の子がそんなもの見ちゃダメだ！！》

その後、見られた記憶をネタに、トコトンからかわれたのは言わずもがなである。からかっている時の彼女の顔は、イキイキしたものだ。った。

俺に自分より年下の女の子にからかわれ、喜ぶ趣味はないので中々の精神ダメージを被った。

~~~~~

《うつ、ひどい目に遭った…》

「いや、面白いからついつい横道に逸れちゃったね。」

そこで彼女は、咳払いを一つし、真面目な顔に戻して元の話に戻った。

「さて、話を元に戻すけど、悪魔がお兄さんだって気付いた僕は、すぐに自分の研究の核たるものを使い、お兄さんの存在の維持と意志の顕現に成功した。」

《…それが今の躰》

「そう。機鋼魔神の素体とその心臓部たる魔力炉だね…」

《そっか…》

そこまで言ってから、彼女の表情は曇り、俯きながら謝罪をしてきた。

「…ごめんね。そんな躰にしちゃって…」

《ん？なんで？》

俺があっけらかんと言うと、彼女は戸惑いながら話しだした。

「何でって、だって勝手な誰かのせいで、悪魔にされて、おまけに機械の躰にされたんだよ？普通なら怒るよ…」

《けど、俺はそのおかげで今も生きてる。確かに巻き込まれたことや、自分のためだけに何十人も殺しやがったのは、めちゃくちゃ腹が立つ！》

「…」

《けど、それは君のせいじゃないだろ？》

「けど…」

《多分だけど、俺が実験の成功例だって、ばれたらかなりやばいんだろ？主に俺が。それで君はいらないリスクを背負った、ちがう？》

「…それは僕にもメリットが有ったから、」

《それでもリスクの方が大きい。》

「…」

コクッ

今回の一件は、実質的には成功しているのである。

そして、その成功例である俺は、気付かれれば、真っ先に目を付けられるはずだ。

そうなればその先に待っているのは、標本かモルモット人生か…いずれにせよ、俺が日の目を見ることは無かったはずだ。

そうならなかったのは、彼女がリスクを侵し、隠してくれているからに他ならない。

《なら俺が言うべき言葉はただ一つ、「ありがとう」だけ。君に恨み辛みをぶつけるのは、お門違いってやつさ。》

「お兄さん…」

《そ、それに、そのおかげで…その…》

「？」

《そ、そのおかげで君に会うこと出来たろ？》

「…」

彼女は俺の言葉にポカンとなり、俺もとつさに言った言葉のクサさに自分自身も恥ずかしくなってきた。

もし俺の躰が機械でなく、生身の体だったら、間違いなくりんごのように真っ赤になっていただろう。

《な、なんだよ？》

「ぷっ…くくく、あっははははははは！お兄さんクサイ！クサイよ！クサすぎるよ！！あはははははは！」

《う、うつせー！俺も恥ずかしいんだから笑うな！！》

「ふふふ、そうだね。このことが有ったから、僕はお兄さんと友達に成れたんだから、悪いことばかりじゃないかな？そうになると早く躰を完成させないとね？」

《そうだぞ！俺の躰も歯車むき出しのままは嫌だしな。頼んだ！》

「うん。頼まれた。最高傑作を目指して頑張るよ。」

話もだんだんと終わりはじめ、俺と彼女の間に和やかな空気が流れはじめた。

「ところでお兄さん。僕とお兄さんは友達なんだよね？」

と、思ったら彼女は目をすぼめ、そんなことを言い、なにやら不穩

な空気が流れはじめた。

その姿に何故かデジャブを感じた。

《あ、ああ。そのつもりだが？》

「なら、お兄さんの名前を教えて欲しいな。それと、僕の名前を呼んでほしいな？愛称で。」

《それ位ならお安い御用だ、って…あ、愛称で！？》

「そうだよ。愛称はもちろん、お兄さんが付けてね？」

まるで、夏に猫が蝉をいたぶって遊んでいる時のような構図になった。

《うぬぬぬ…（嵌められた！？あの不穏な空気は、これの前触れだったのか！？）

ああ、チキシヨウ！どっかで見たことがあるはずだよ。さっきじられたときと同じじゃねえか！？）》

「ふふん、どうなるかな？楽しみ《アリイ》だ、な？って、へ？」

思いの外、短い時間で思いついた愛称だったが、俺の考えうる愛称の中で一番可愛いと思ったのを出してみた。（いじられないように早く考えたとかじゃないんだからな！）

《俺はこれから君の事をアリイって呼ぶけど良いかい？》

「アリイか。うん。素敵な呼び方をありがとうね？お兄さん。けど、あんまり狼狽えてないのが面白くないな。ぶーぶー。」

《気に入ってもらえたなら何より。

そして、何時までもいじれると思うなよ。あとブーイング禁止!》

そこまで言つて、俺は心の中で小さく咳払いをし、姿勢をなおし、真面目な表情を浮かべ、自己紹介を始めた。(機械の躰なので、表面上は何も変わっていないのが少しマヌケだった。とは後のアリイ談)

《今まで名乗らず、失礼しました。自分の名前は姓が嵩月、名を奏と申します。

親しき者たちからは、カナデと呼ばれてます。是非とも、そちらで呼んでいただけると幸いです。

これからも迷惑を掛けることになると思いますが、よろしく願います。》

これまでいじられた分を返そうと、出来る限りきつちりとした自己紹介をしたのだが…

「うう。お兄さんが畏まってる、サブイボがたつよ。」

…どうやらアリイにはお気に召さないようだ。

《ぬぐぐ、人がちゃんと挨拶をしたと思えば…俺の名前は嵩月 奏だ! よろしくな! アリイ!》

「お。それでこそ奏お兄さんだよ。僕の方もよろしくね?」

俺の日常は何の前触れもなく消え去った。

でも、悪いことばかりでもなかったみたいだ。

それに、これからまた新しい日常を作ればいいんだ。
そう思い、再出発する決意とともに、アリの呼び掛けに力強く答えた。

《おうともさ！》

~~~~~

## 小話

《しかし、黒鐵が…格好はアニメ版になるのか？》

「原作に忠実にしようかと思っただけど、あの形、かつこ良くな  
い…それに奏お兄さんのイメージもアニメ版の方が強かったしね  
。けど、スペックは完全再現 +  $\alpha$  してるつもりだよ？黒鐵・改な  
みだよ？」

《あん？俺の記憶から読み取って作ったのか？知ってたわけじゃな  
く？》

「そうだよ。最初に見たときに、ビビっ！と来たから作ったんだ。  
元が無くて再現できる僕は優秀なのだ。  
それから、奏お兄さんしつもん。」

《はいはい。何ですか？アリイ君。》

「名前、何で女の子と同じなの？」

《知るか！》

~~~~~

第三話 ある意味、不幸な幸運。(後書き)

自分の中での科学者・研究者はイネスさんのイメージがある罷。
ごめんよ主人公、相槌ばっかでアリのの半分ぐらいしか喋れてない
ね。

補足説明

「シュレディンガーの猫」

動物虐待事件も真つ青な実験。

振動を与えると二分の一の確立で毒ガスが出る箱の中に猫を入れ、
シェイクする。

そうすると、箱の中では毒ガスがでて猫が死んでるかもしれないし、
そうでないかもしれない。

しかし、箱を空けるまではどちらとも言え、どちらとも言えない。
つまり箱のなかはあらゆる可能性に満ちた世界である。

って話だったと思うよ！

第四話 激流に流される。(前書き)

はじめに。お詫びを…初戦闘が入るのですが、入る予定だった原作前に入れませんでした。

……解せぬ。

第四話 激流に流される。

あれから数ヶ月が経ち、俺の軀はほぼ完成した。

歯車やコードがむき出しだった軀だが、今では黒光りする装甲で覆われ、所々に金の線が走る見事なものになっていた。

本来の予定なら、まだ装甲は付けてないはずだったが、俺の意識があるおかげで不具合の自己申請が出来、作業速度や完成度が大幅に加速したらしい。

「いや、奏お兄さんのおかげだよ。僕が不具合を調べなくても勝手に教えてくれるって、楽だね。」とはアリの言だ。

ちなみに、俺の軀は本物のアスラマキーナよりも二回りほど小さい（それでも2メートル強ほどあるの）他はほとんどアスラマキーナそのものだった。出力もそのままなので小回りが利く分、俺のほうが強いかもしれない。

また、軀を動かすのにも慣れた。

誰かが言ったかは知らないが、「人間は順応する生き物」らしい。

俺もその言葉に従うかの様に、今の軀に馴染んでいった。

最初は動く時の感覚がつかめず、歩くことも億劫だったが、一度慣れてしまうと後は簡単だった。子供が自転車に初めて乗るときと同じようなものである。

そして現在、俺が何をやっているかというと、

《…やはり重力魔法を直接ぶつけてベタンって言っか？いや、それはあまりにストレート。ひねりが無さすぎるか…》

暗黒魔闘術はどうだ？幸い俺の能力は重力制御、素の魔力を放出してからそれを重力で押し固めれば出来るはず…いやいや、…》

「おたく街道まっしぐらであった。暇を持て余した俺は、俺の持っている知識を総動員してどうすれば暇を潰せるかを考えた。」

それがこれ、ネタの実現化である。これが遣りだしたら止まらないこと止まらないこと。おたくだったのでネタの在庫に困らなかった。さすが俺。まさに俺。カフェオレ。

邪気眼なんて目じゃないぜ。やつぷー。」

《、ってなに地の文ぽく言ってくれてんのさ！？確かに殆ど正解だったけど、最後の何んだよ！？カフェオレとか、邪気眼とか、バカにしてんのか！？あとオタクっていうな！！》

「うん。d(o ^ ^ o)ニツコリ あと、それむり。」

《爽やかな笑顔で肯定されたあ！？アンド拒否！？》

「べつつつ、つにー。僕が頑張ってるのに何遊んでるんだろ、とか、ちょっと手伝うことくらいしてくれても良いんじゃないかな、とか、ニートで年下の紐とか死ねば良いのに、とか思ってたんじゃないよ？」

《最後に毒吐かれた！？

ぬううう、けど仕方ないだろ？こないだの魔力放出実験で駄の粗探しは終わったし、俺はA Eじゃないからバグとりもしなくていいし、この間『手伝おうか？』って聞いたなら『邪魔』って言われたし、この駄じゃあ働く以前の問題だし。アライも分かってんだろ？》

「分かってても納得できるもんじゃないんだい！奏お兄さんだけずるーいー！僕も一緒にあそぶんだーい！」

《こら、行儀の悪いことをしたらいけません。全く…》

……ギャーギャー……ギャーギャー……

この数ヶ月、毎日大体こんな感じだった。アリイは基本俺が安置されている工房に詰めている。工房を離れるのは部品や装甲、の生成をするときか、食事をするとき、後は上司から呼び出されたときぐらいだ。

ここに来てからの知り合いはアリイだけだ。基本的に作業はアリイだけでやっているの、他の人には特に会わない。前に一度、研究内容と進捗状況を確認しにきた上司が来ただけで、それからは誰も来ていない。

来た時もアリイから「喋らないように」、と注意されていなかったもので、会ったと言えるものではなかった。

アリイといるのは楽しい。ここに来てから初めてできた友達だし、他に話す人もいないからだ。アリイも人生初の友達ということで、俺にかなり懐いてくれている。最近の趣味は俺の体を物理的にいじること（技術的な意味で）と、俺で遊ぶこと（からかう的な意味で）らしい。

前者はいいが後者は勘弁してほしい。俺のライフががりがり削られていつてる。

「というか、お兄さん。こないだ聞いたとき『波乱万丈な非日常より、平穏な日常のほうが好きだ。』なんて言ってたけど、めっちゃくちや非日常に馴染んでるよ。しかも、考えることが思いつき戦闘方向に向いてるよ?」

アリイはそう俺に言った。確かに俺は喧嘩や戦闘は好きじゃないし、静かに暮らせる日々と戦闘の毎日のどちらかを選べといわれたら間違いない静かな日々を選ぶ。だけど

《いや、使える能力があるなら、それを使いこなせるようにならないと。それに、俺たちは色々と「普通」じゃなくなっただから、この先どうしても面倒ごとに巻き込まれるだろ？それも荒事に。》

「どうしてそう思うの？」

《アリイに教えてもらった魔法やそれ関係の技術は、どう考えても戦闘方向に偏ってる。日常に溶け込むようなものじゃないのが多かった。

ということとは、魔法というのは戦争や、戦いの中で発展してきたんだって推測できる。》

そう、この世界の魔法は初等魔法の「魔法の矢」でも十分に一般人を大怪我するだけの威力を秘めている。この上さらに中級、上級とあるのだから明らかに戦闘用だといえるだろう。

《次に俺の躰、俺の躰は汎用だけど、戦闘にも十分対応出来るように、調整されているのがわかる。この二点から簡単にわかることだと思っけど？》

「…むうう、合ってるよ。奏お兄さんのくせに生意気な…」

《生意気って言われた！？

まあ、そうじゃなくても同じ事はしてたと思うけどな。》

「なんで？」

《中二病は男の子が一度は通る道だからだ！！
そして、何よりその方がカッコいいからだ！》

「……そんなだからおたくって言われるんだよ」「じとー」

不思議そうな目をして首をかしげていたアリイだが、ふざけてみたら厳しいお言葉と半眼になった白い目をプレゼントされた。

《冗談だ、冗談。あとオタクっていうな。》

「ハイハイ、なら本当の理由は？」

《…世の中にはたくさん無理不尽で溢れている。それこそ、「こんなはずじゃなかった事」ばかりだ。

そんな理不尽に巻き込まれた時、力ない奴は淘汰されるしかない。自分が正しいと思っても、異をとねえる資格すらもてないんだよ。》

そう、やさしい人間はたくさんいるが、その数と同じだけひどい人間がいる。自分が正しいと思っていても、それを主張するだけの力を持っていないと、それは世界には通らない。

《だから、俺は平穏を望みながらも力を求める。自分の心から逃げたくないから。そして、自分の信じる道を、信念を貫きたいから。》

「奏お兄さん……」

《元いじめられっ子の俺が言うんだ、間違いない！それに臆病もんで業突く張りなんだよ。自分の大切なもの離したくないし、離さない。しっかりがっちりキープするのさ！》

「もう…シリアスに茶々をいれたらダメだよ？」

《はいよー。》

~~~~~

「じゃあ僕は奏お兄さんの選択肢をさらに増やすために、もうひと頑張りしましょうか。」

アリイはそう言い、工房から出かけようと出口へと向かった。しかし先日、躰はもう完成した、と言われたので何をするのか、検討がつかなかった。

《うん？もう俺は完成したんだろ？まだ何かあるのか？》

「ふふふ、奏お兄さんは完成したけど武装がまだでしょ？それを完成させるまではまだまだ100%とは言えないんだよ！！」

《な、なんだってー！って、黒鐵の武装ってあったか？あっても白銀の刀だけだったような？》

そう。原作の黒鐵は高いトルクを生かした格闘や、固有能力の「黒の拳撃」という高重力エネルギーを持った球体を生み出し相手を攻撃する戦闘を主としていた。

原作の黒鐵が武器を所持していなかったのは、おそらく素手だけでも十分強いからだ。それに準ずる俺もかなりの戦闘力を発揮すると思われるのだが…

「ふふ〜ん。それは出来てからの楽しみだよ。」

《？》

不敵な笑みを残し、アリイは工房を後にした。  
この時、俺は失念していた。アリイは天然で「遠慮」や「自重」ということを無視できる子だということを。

~~~~~

また数ヶ月後

《これはひどい！&その発想はなかった！》

「どうしたの奏お兄さん？いきなり叫んで？」

今は、武装も全て完成し「完成祝いしようよ。」といったアリの希望どおりお祝いをしていたところだった。

《いや、武装を作る前のアリイの話を思い出してたらつい、な？まさかこうなるとは…これじゃあ「ぼくのかんがえたカッコいいアスラマキーナ」状態だよ！強いから良いけど。》

アリイは「自重」という言葉をどこかに置いてきたらしい。

あれから、武装を多数製作してきて、「もしやネタ(?)でやってるのか？」と思えるような武装だったのだが、全てマヂだった。まさか、外見だけでなく中身まで完全に再現するとは…アリイ恐ろしい子！

「使いこなせなきゃ、猫に小判。豚に真珠。奏お兄さんにアスラマキーナだけだね。」

そう使いこなせねば意味がないのだ。数ある武装の中、俺が使いこ

なせている武装はまだないのだ。（使用しないときは影の中に保管している。）

理由はわからないが、固有能力も原作より威力が低かったくらいだ。使いこなせるように、日々精進しているが遅々とせず進まなかった。

《ご、ごもつともで…って待てぬ。前の二つはわかるけど、最後のは只の悪口だろ！？》

「あつはつはつは。そんなことないよ？全部悪口だもん。」

《な悪いわ！？》

~~~~~しばらくお待ちください~~~~~

《はあ、はあっ……》

「まあまあ、落ち着いて？奏お兄さん。折角の完成祝いなんだから、怒ってばっかじゃだめだよ？」

《ぐっ、アリイから焚き付けといて…（いや、アリイの事だから生物が呼吸するかの如く無意識にか…あ、あり得る。）》

「うん？どうしたの？」

反論しようとしたが、これ以上からかわれると体力（精神力？）が持たないので、ごまかした。

《イエ、ナンデモナイデス。（余計な被害は回避しよう。これ以上いじられてたまるか！）》

「ふふふ、それじゃあ今を楽しもうよ。奏お兄さん？」

《…そうだな。楽しもう。》

そういつて、完成祝いを再開しようとしたとき、

ドオオオオオン！！！！

大きな衝撃と爆音が研究所に轟いた。

「きゃあっ！」

《アライ！》

突然の激しい揺れにアライはバランスを崩し、こけかけたが俺の支えが間に合い、そうならず済んだ。

《大丈夫か？いったい何が…》

爆音のあと、感知機が作動し、警報が鳴る。その後も小さい爆音と振動が続き、工房の外があわただしくなった。

どうやら、ただの火災や地震というわけでは無さそうだ。それに…

「警戒警報が鳴ってる…侵入者！？」

《……アライ。俺から離れるなよ。》

「奏お兄さん？」

俺は警戒を高めて、アリイを引き寄せる。

先ほどから自身の「感覚器」をフル稼働させ、「知覚領域」限界まで広げると、こちらに近づいて来る存在が確認できた。

しかも、一体や二体でなく大小併せて数十体にのぼるものだった。

《どうやら、今回のお客さんは招待状もないのに俺たちのパーティーに参加したいらしい。》

「えっ……」

色々なことが連続して起きたせいで状況確認が間に合わないアリイは、俺の言葉に困惑の声を漏らした。

《大丈夫だ。アリイを守るのは、なんたってこの俺なんだからな。大船に乗ったつもりでいろ。》

「奏お兄さん……」

調子の良いことを言ったものの、俺もかなりびびっている。喧嘩ならそれなりに経験はあるが、殺しあいとは別である。生身なら冷や汗が止まらず、足はガタガタと震えていただろう。だが、今はそういう訳には行かなかった。俺には守らなければならない人がいるのだから。

アリイに震えを悟られないよう、恐れる心に喝をいれ、何でもないうちに振る舞った。

「奏お兄さんはどこか抜けてるから、奏お兄さんの船だと途中でそこが抜けちゃうよ。」

《あらっ…。格好付けてんだからそこはミソを付けるなよ。》

「そうだね。それじゃあ今後は気を付けるよ。」

冗談をいえる程度には落ち着いたらしい。お互いに言い合うことで、不安や恐怖をなんとか緩和することができた。

《たのむな？…来るぞ。》

ドゴン！！

瞬間、工房の扉が音を立てて吹き飛んだ。そこに立っていたのは、山羊の頭に人の体、コウモリの羽という典型的な悪魔の格好をした異形を先頭にかんりの数の異形たちがいた。

「ミツケタ。エモノダ。」

《よう！ここは貸切なんだ！遊びに来たんなら、他当たってくれや！》

とりあえず、先頭の異形に軽口を叩きながら警告をした。そして、いつでも動けるよう左で魔力を込めた拳を作り、右でアリイを守るように抱えあげた。

「黒イノハ壊サズ、女モ生ケ捕リ。タダシ、面倒ナラ…」

「両方壊シテ、持ッテイク。」

山羊頭の異形がそういうと、周りの異形たちがいっせいに襲い掛かってきた。

《ちっ、無視かよ、っと!!》

俺は瞬時に左拳にこめていた魔力を開放し、重力球を前方の異形達にたたき込んだ。

その一撃だけで前方にいた異形の半数は消滅した。

元のと比べたら見劣りするだけで、威力は十分にだった。

《ちいっ！一体一体はたいしたことないけど、数だけ多いな!》

その一撃だけでは進行を止めることはかなわず、左右から異形たちが傾れ込む。

そんな中、俺は相手の動きを見切り、腕の中のアリイをかばいつつ、一体つつ拳撃を、貫き手を、手刀を、蹴撃を確実にたたき込み、倒していく。

もちろん、無傷には行かず、小さい傷が装甲に次々と付いていく。

《(だけど、その程度で止まる俺じゃあ、アリイの作った「黒鐵」じゃ無い!!)》

左から接近してきた異形が俺に攻撃を入れるよりも早く、拳を打ち込み、たたき潰す。同時に右から来た異形を蹴り穿つ。

上から襲い掛かる異形を能力で地に這いつくばらせ、中国拳法の震脚の要領で踏み潰す。

《はあっ!!》

遠距離から光線が放たれるが、重力を操作し、空間を歪ませ光線を逸らし、弾きそれらが無効化する。

そして、射ってきた方向へと重力球を放ち、打ち倒す。俺と異形達

のものの10分程度の攻防で、工房は原型を留めないほど破壊された。  
だが、相手もほぼ壊滅し残りは山羊頭と何体かの小さい異形だけだった。

「奏お兄さん大丈夫？」

そこで腕のなかのアリイが心配そうに声をかけてくるので、いつもどおりの声色で応えた。

《大丈夫さ、細かい傷だけでたいしたことない。アリイは大丈夫か？流れ弾が当たってないか？》

強がりなどではなく、実際に気にする程ではなかった。

それよりもアリイが傷付いてないかが不安だった。アリイの周辺を中心に「物理保護」（重力操作し、攻撃がきた瞬間に重力を高め、防御壁を展開すること）を展開していたがそれでもだった。

「奏お兄さんが守ってくれてるから大丈夫だけど…奏お兄さんかなり強いね。」

《おう。俺もびっくりだが、流石アリイが一年弱も使って作ってくれた駄だ。まだまだいける。それに…》

それまで傍観を決め込んでいた山羊頭がこちらに向かって歩みだした。

《これから本番ばいしな。しがみついておいてくれ。》

「うん。分かった。」

そう声をかけ抱えてる腕に力をいれる。アリイもまたより強くしがみつく。

「ナカナカヤルナ、ソレニコノ匂イ、キサマ、混ジリモノカ？」

《混じり物つてのが何を指すかわからん。このまま帰ってくれたら嬉しいんだが？（今まで多対一だったから一番慣れてた素手で行ったが、こいつはキツいか…）》

「ソレハ無理ナ話シダ。」

《だよなー。なら！「白銀」、抜刀！！》

影に手をいれ、その名のとおり白銀の刀身を持つ刀「白銀」を引きずりだした。

これが「アリイが作った武装Part1」であり、一番使いこなせた武装である。

極太の巨大な太刀（只、俺が持つと普通の太刀のように見える）でナックルガードのように、拳のところまで刀身が伸びているのが特徴である。

「ホウ。イイ刀ダガ…使イ慣レテハイナイナヨウダナ。ソレデ私ヲ倒セルカナ？」

一見してすぐにばれた。

やはりこの山羊頭、強いだけでなく戦い慣れているようだ。

《（ばれてるか…）試してみるか？》

「ソウシヨウ。」

俺が挑発をすると山羊頭がそれにのつた。すると山羊頭の体がぶれ、突然目の前に現れた。

《（残像とか、速すぎんだろっ！）はっ！！》

慌てて「白銀」を横一線に薙ぐが当たらず、体が泳ぎ大きな隙を生んでしまった。

そして、山羊頭の異形も、その隙を見逃すほど甘くなかった。

《（まずっ！？）》

「コレグライハ受ケテミセロ。」

そう言ったと同時に打ち込まれたのは、ただの右ストレートだったが、その速さは人のそれを凌駕し、アスラマキーナの躰になった俺でも、咄嗟に「白銀」を盾にし、ガードするだけで精一杯だった。

《ぐわあっ！！》

「きゃああっ！！」

その一撃だけで俺は壁に叩きつけられた。その衝撃を受け、抱えるアリイからも悲鳴が上がる。

《（ただの一撃がこんだけ重いつて、どんだけなんだよ！悪魔か！？あつ、悪魔だった。）》

そう心の中で毒づきながら立ち上がる俺を、山羊頭はどこかがつかりしたような雰囲気を漂わせながら、溜め息を吐いた。

「ソノ程度力、思ッタヨリ齒ゴタエガナイナ。所詮八混ジリモノ力。」

《だから、さつきから混じり物混じり物って意味がわからん、って言うてんだろ。頭ん中すっからかんか、この山羊頭。》

先程から何度も分からない単語を連呼され、どこかバカにされてる気分になったのでつついっつい切れ気味に言い返した。

「口ダケ八達者ノヨウダナ。」

《（ちい、不味いな、スペックは俺のほうが高いみたいだけど、それも少しだ。それにあの野郎かなり戦い慣れてる。戦闘経験の差がもろに出てる。時間を掛けて戦うか、「白銀」の能力を使うかすればなんとかなるかもしれんが、それじゃあアリイがもたん。）》

一度の接触で自分と相手の差がはっきりと分かった。

そこから分析を試みたが長期戦になるとアスラマキーナの俺は問題ないのだが、生身のアリイはそうはいかない。

それに俺が武装を「使いこなせ無い」というのは、能力を使うことは使えるのだが、制御しきれないからだ。

使いこなせている部類に入る「白銀」も例外でなかった。

「奏お兄さん。」

《なんだ、アリイ。出来るなら後に…》

どう戦うかを考えていると、不意にアリイから声をかけられ、応える余裕のない俺は後回しにしておうと声を出しそうとしたが、

「僕のことは気にしないで全力をだして。」

《…っつ！？バカか！だけどそれをやるとアリイが！「僕は大丈夫だよ！自分の身を守くらは出来るよ！」……アリイ…》

「だから、奏お兄さん。全力を出して。それであんなカツコ悪い山羊頭なんか倒して、かつこいいところを見せてよ！！」

迷っていた俺だが、アリイの剣幕に押されてしまった。

そこまで言われて、やらなければ俺の男が廃れてしまうではないか。

《……ふふっ。なら仕方ない、わがままな姫さまのために頑張ろうしよう。》

防御、頼んだぞ。》

「うん！」

「もう終ワツタか？」

そこで今の今まで何もせず、余裕の構えだった山羊頭から声がかかった。

《待っててもらって悪いな。良いのか？そんなに余裕に構えてて？》

「構ワン。キサマ程度が私ヲドウニカデキルトハ思ワンシ、ソウナレバ、ソレハソレデ面白イダケダ。」

そんな山羊頭に苛立ちながらも、その慢心に感謝した。  
そして俺は、

《…そうかい。ならその余裕のまま、全力を出さないで！即効で倒れてくんない！》

「白銀」を持つ左腕を突き出し、腹を括った。

《「白銀」！その真価をみせて見ろ！！》

朗々と呪を紡ぐ

《——闇より深き深遠より出でし》

この呪が表す、黒鐵と対をなす白きアスラマキーナの姿を

《——其は、科学の幻影<sup>かげ</sup>を裁く剣！！》

空間をも切り裂くその力を思い浮べながら！

ゴウッ！！！！

呪文の詠唱が終わると、俺と「白銀」から魔力の流れが激流となり、その内に留まりきらなかった魔力が行き場を求め体外へと迸り、さながら白い静電気のように体を包み込む。

「ナ！？ナンドコノ、異常ナマデノ魔力ノ高マリハ！？」

予想外なまでの突然なパワーアップに山羊頭があせりだす。しかし、そんな山羊頭を無視し、攻撃に移る。

《そんなの今はどうでも良いだろ？時間もないし、あんたはここで終わるんだからな！》

そう、長引かせる訳には行かないのだ。

これで倒せなければ、アリイを守ることとはできないのだから！

《せいっ！！》

気合とともに踏み込み、「白銀」を振り下ろした。

「ソナモノガ中タルモノカ！」

《それは、どうかな！》

技術も何もない、気合だけで振られた一撃が中るわけなく、山羊頭のスウェーバックで避けれるはずだった。そう、はずだった。

しかし予想と反し、山羊頭の右腕は鈍い音を立てながら地面へと落ちていった。

「ナッ！？ナゼダ！ワタシハ確力ニ避ケタハズダ！！」

私ニ何ヲシタ！コノ混ジリモノ風情ガアア！！」

《自分が何をしたか懇切丁寧に教える馬鹿がどこにいる！それに意味がわからん、つつつてんだろうが！さっさと斬られて黙りやがれえええ！！》

山羊頭は自分の腕が切り落とされたことに激昂し、俺は時間がない

という焦りから獣のように吠え、手にしている「白銀」を振り回す。滅茶苦茶な連撃だが、その斬撃はその射線上にある全てを切り刻む、一撃一撃が防御不能にして必倒の威力である。

「（落ちツケ！アノ刀ハ脅威ダガ使イ手ハド素人ダ。保険二障壁ヲ展開シツツ、コノママ避ケ続ケレバ、必ズ隙ガ生マレル！ソコ二潰ケ込メバイイダケノ簡単ナコトダ！）」

《がああああー！！》

ここで山羊頭は今までの戦闘経験から自分を宥め、冷静さを取り戻した。そして、一撃で相手を確実に仕留めるため、相手の隙をうかがい始め、その時がきた。あまりの勢いに体が泳いでしまった。

先ほど一撃をもらった状況と同じだが、決定的な違いは相手が確実に殺しにきているということだ。

そして、その状況でこの隙は致命的といえる。

「（ココダ！）殺ッター！！」

その隙に山羊頭が必殺の一撃を捻りこもった。

《残念。》

その声が聞こえ、体が動かずに視線がどんどんズレていく。

全てを避け一撃を入れていたはずなのに、気づくと自分の体は斬られていた。

「ナゼダ…私ハ…全…テ、避ケタ…ハ…ズ…」

《だから、誰が教えるかってんだ。》

そう言い最後の一撃を入れて、山羊頭は消滅した。  
これでこの初陣は幕を引いた。

~~~~~

小話

《やっと、お、終わったか…》

《大丈夫かアリイ？》

「大丈夫だよ。少しふらふらするけど、なんでもない程度だよ。」

《そうか、ならよかった。疲れた〜。》

「奏お兄さん。」

《うん？なんだ〜？》

「守ってくれて、ありがとね。私の騎士様？」

《どういたしまして。お姫様。》

「それと質問なんだけど、あれはなに？」

《あん？…なんぞあれ？》

「推測するに、「白銀」に斬り裂かれた空間だと思うんだけど？」

《あゝ、かも？》

「それで、それが膨張してこっちに向かってるように見えるんだけど？」

《俺もそう見える。》

「……………」

《……………》

「奏お兄さん。」

《なんだ、アライ？》

「嫌な予感がするんだけど？」

《奇遇だな。俺もだ。》

《「…つまり」》

《やっぱりそういう落ちかよー！！》

「奏お兄さん」「白銀」「白銀」使って制御してー！！」

《アホオ！もう收拾つくか！ってか余計に荒れるわー！！》

「奏お兄さんのバカアアアアアアー！！！」

《すまあ ああ あん！！！》

~~~~~

《「」」だ？》

## 第四話 激流に流される。(後書き)

はい。いろいろと突っ込みどころがありますが、ご容赦ください。

次こそは激動の原作前、というか「ネギま」に絡むと思いますので、よろしく願います。

p.s.

エヴァ時代途中下車と大戦時代直通とどっちにしよう・・・

### 用語説明

#### 「感覚器」

アライが作ったよくわからんけどすごいやつ。遠くのものでも感じることができる。「見えざる水銀」とか「触れざる硫黄」とか「魂の塩」が使われてそう。

参考は「吉永さん家のガーゴイル。」のガー君たち自動石像。

#### 「知覚領域」

上記の「感覚器」の届く範囲、常時では人並み程度しかないが索敵時には1?まで広げられ、戦闘時には半径10mまでに狭まる。

戦闘時の範囲は己が間合いの距離である。

また、訓練により「知覚領域」は訓練により広げることが可能である。

参考は「吉永さん家のガーゴイル。」上記と「ワールドエンブリオ」<sup>ケイジ</sup>の意識圏。

#### 「物理保護」

作中に説明したとおり、重力操作で攻撃がくると瞬時に重力を高め、

防御壁を展開すること。

参考は「破壊魔定光」の物理保護。

（実は作者の大好きな作品。平行世界の考えとか、実験はアスクラよりもこっちの方のイメージが強かったりする。）

## 第五話 闇の中の光 (前書き)

悩んだ結果、こういうことになりました。

多少の無茶設定があってもスルーしてください。しかし、さすがに無茶過ぎるだろ！と言うときは作者にご連絡をば。

## 第五話 闇の中の光

日が落ち、木が鬱蒼<sup>うつそう</sup>と茂った暗い森の中を進みながら、俺はただ一言呟いた。

《…どうしてこうなった》

「奏お兄さんが最後の最後で気を抜いたから？」

無情にも、真実100%の事実を突き付けてくるアリイを肩に乗せながら尚も進む。

《…その可能性は無きにしも非ず。》

「これからどうするの？奏お兄さん。」

心の中で汗をだらだらとかき、遠い目をしながら現実逃避をしているが、それをスルーし、これからどうするかを聞いてきた。

《そうだな、まずはここがどこでいつなのかの確認だな。》

「おお…。経験者は一味違うね。」

《おう。二回目だからな！》

俺の時のように、平行世界に移動してしまった可能性もあるし、場所だけ移動した可能性もあるし、時間を移動した可能性もある。平たく言えば、これからの進路を決めるにも現状が把握できないとどうにもできないのだ。

「奏お兄さん隊長！周囲に人影は見当たりません！というか木が邪魔で分かりません！」

《むっ、なら人が居そうな場所まで徒歩で移動だ！アリイ隊員！あと、最初と最後にはサーをつけるんだ！》

「サー！了解しました。サー！」

暇だったので軍隊ごっこをしてみたのだが、

《……………》

「……………」

「飽きたね〜。」

《ああ、飽きたな。》

すぐに飽きてしまった。

「それはそうと、奏お兄さん。傷の方は大丈夫？」

《ああ。大丈夫だぞ。もろに食らったのは山羊頭の一撃だけだし、他は装甲の上に浅い切り傷を付けられただけだしな。

だけど、俺の躰はそれ位は自己再生出来るだろ？ホント反則だよな、この躰。》

「さすが僕の作った躰だね！」

そう言い、俺の肩の上で誇らしげに胸を張るアリイだった。  
本当に流石である。その鬼性能加減もだが、それを思いつき実行するフリーダムさ加減が。

《まあ、そんな訳で俺的にはアリイの方が心配なわけだ。》

「僕？僕は奏お兄さんが守ってくれてたおかげでぴんぴんしてるよ。」

《さやか。ならよかった。…むっ。》

他愛のない話をして暇を潰していたが、索敵モードで掘っていた「知覚領域」に反応があった。

「奏お兄さん、どうしたの？」「知覚領域」に何か引っ掛かったの？」

《ああ。けど、これは…人かな？…体の小さい子が大勢に追いつてられてるのか？この時間帯と周りの環境からすると盗賊とかか？》

「どうするの？」

アリイがにやにやした顔を近付けながら、そう聞いてくる。

《アリイ…答え、わかってて聞いてるだろ？》

「あつ、バレた？」

《はあ…気付いちゃったんだから、知らんぷりするわけにいかんだろ？》

このままじゃ何の情報もないんだ。どちらにしろ、行かなきゃ始まらない。》

「うん、そうだね。それでこそ奏お兄さんだよ。」

《なんだそりゃ、それじゃあ行くぞ?》

「はい。」

そう声をかけたのち、目的地に向けて猛スピードで駆けだした。そうこうしているうちに、子供が追い付かれたらしく、追いかけていた方にじりじりと間合いを詰められていた。

《むっ、少しまずそうだ。とばすぞ!》

「おっけー!奏お兄さん、行っちゃえー!」

《おうつ!》

そこで心の中でギアをトップに入れた。躰から魔力が放出され、踏みしめた地面がはぜた。

背景が倍速で流れ、スピードはさらにあがった。(そんな中アリイは「あはは!速い!すごい!」と楽しんでいたりする。)

しばらくすると小さい崖を背に、黒いマントをした髪の長い金髪で見た目十歳程度の少女が、小汚い中世欧米の農民ちっくな格好をした男たちに囲まれているのが見えた。

《うおおおりゃあああ!!!》

状況は一向につかめないが、どう見ても少女が襲われているようなので、両者の間に入るように飛んだ。

《何か知らないけど、ちょっと待ってくれないか？》

「な、何だきさま！そいつの仲間か！」

いきなり空から現れた俺たちに驚いてるようだったが、俺が声をかけると正気に戻り、男のなかの一人が誰何してきた。

《何って…一言で言うと、通りすがりの迷子その一、？この子とは初対面だ。》

「奏お兄さん」。いくら何でも迷子は格好つかないよ。」

《けど、事実だろ？》

「むう」。なんか納得いかないよ。あ、迷子その二です。よろしく。」

締まらない俺の自己紹介にアリイが不満を表すが、他にうまく紹介も浮かばないので、それで我慢することにしたようだ。気づいたように挨拶をした。

「きさまら！ふざけてるのか！」

《ふざけてるつもりはないんだけどな？》

「ね。」

俺たちとしてはいたって真面目に言ったのだが、他人からしたらバカにしているように見えたようだ。

「なら何故、そいつを庇う！そいつは薄汚い吸血鬼だぞ！！」

《えっ、ホント？》

……コクッ

その言葉に驚き、少女の方に振り返って反応を見ると苦々しく頷いた。正直、イメージの中にある吸血鬼と全く違うものだった。

《ふ〜ん。吸血鬼っていたんだ。》

「奏お兄さん、奏お兄さん。それを奏お兄さんが言っちゃダメな気がするよ〜？」

《それもそうか。》

そんな惚けた感想を述べたのだが、アリイに指摘されよくよく考えてみると、今は悪魔（鋼鉄製の）だった。この子が吸血鬼というよりも、俺がこの躰で悪魔だということの方が洒落にならないように思えてきた。

《おい、そのあんた！》

「な、なんだ！」

《退く前にこの子に二、三質問していい？》

「…それで退くなら好きにしろ！」

ここで俺と一戦交えるよりも、要求を聞いて自主的に引いてもらった方が賢明だと判断したようだ。

俺も荒事はしたくなかったのでちょうどよかった。

《あいよ。ありがとよ。っと、質問しても良いかな？》

コクッ

なるべく、視線を同じ高さに行きよう（それでもかなり高いので、全然同じ高さにならないのだが）に、少女の前で膝を折って許可を取った。

少女もそれに応えてくれたので、質問を続けた。

《まず最初は、君は吸血鬼で血を吸ったことがある？》

…コクッ

まあ、これは相手を考えれば当たり前なので、直ぐに次に移ることにしよう。

《君が吸った相手は強制的に吸血鬼になる？》

フルフルッ

どうやらここは俺のイメージとは違うようだ。

伝承や、映画のように食人鬼グールにならないのなら僥倖である。

《ふむ、君は生きるために仕方なく血を吸ってる？》

…コクッ

これも先ほどと同じく、予想していたことである。これで俺の中の確認事項は聞いた。

そろそろ、周りの男たちも苛立つてきているようなので、次の質問を最後にすることにした。そして、その質問は俺が今、一番聞きたいことである。

《最後、君は血を吸う以外は、何も悪いことはしていないと思う？》

コクッ

それまではどこか申し訳なさそうに頷いていたのが打って変わって、少女は俺の問いに力強く頷いた。俺はその目に確固たる意志とプライドを感じた。きっと少女の中でそれだけは引くことができない、最後の一線なのだろう。

《そっか。》

その目を見て、俺は自分がとる指針を決めた。

「おい！もう良いだろ！そこを退け！！」

《あいよ。》

苛立った男の一人が吠えてきたので、適当に声をかけながら退きだした。

そんな俺に少女は困惑の表情を顔に向けてきたので、少女だけに聞こえるように声をかけた。

《大丈夫だ。ちょっと手荒いけど、助けてあげるから。安心しろ。》

そう言い、俺は手を振りながらこの集団から離れるべく歩き出した。

「奏お兄さん、どうするの？」

少女に声をかけたのは見たが、あっさりと引いて離れていく俺に対し、訝しむようにアリイが問いかけてきた。

《手は打ってあるさ、な？》

「あ、なるほど。嘘つくなんて、奏お兄さん<sup>フル</sup>も悪だね。」

右腕を見せながらアリイにそう言つと、アリイも俺が何をするかを察したらしく、悪戯をする子供のようなニヤニヤした目を向けてきた。

《この程度のこと、嘘とは言わん。せいぜい契約の不備を突いたと言ってくれ。》

俺たちはそんな会話をしながら、暗闇の中に消えていった。

そして、男たちは俺たちが居なくなつたのを確認して、少女に向き直った。

「邪魔が入ったが、そいつらも向こうに行った。もう逃げれると思うなよ！」

『そつだそつだ！！！』

「この吸血鬼を血祭りにあげろおお!!」

『おおおお!!!!』

男たちは各々の手に凶器を持ち、大声をあげながら少女に襲い掛かるうと走りだした。

少女も戦闘になることを覚悟し、四肢に力を込めた。

『おおおお……おおおお?!』

突如、向かってきた男たちは何かにつまづき、一人残らず転けた。あまりに衝撃的な映像のせいで少女は啞然とし、自分の足に絡み付いてきた糸に、気付くことが出来なかった。そして、気付いた時には、

《フーーーーッシュ!!》

「うにゃああああ?!」

「出たー!吸血鬼の一本釣りだー!!」

《「わはははは!!」》

先程の二人組（テンションがいやに高い。）に釣り上げられていた。

「うにゅっ…」

釣り上げられた本人は強烈な回転と、突然かかった衝撃に目を回していた。

《さて、改めて…》

「そうだね。」

《「逃げようか。」るか。》

逃げた。脇目も振らずに逃げた。後ろから「追えー！」とか「このクソ野郎がー！」とか聞こえるが、全くの無視である。

その夜、新月の闇夜の中を黒い魔神が金の光ををなびかせながら、どこか楽しそうに走り続けた。

これが、彼ら三人の初めての出会いだった。

~~~~~

《ここまでくれば大丈夫だろ。》

ひとしきり走ってから、「知覚領域」に何も反応の無いところで止まり、肩に乗せている二人を降ろした。

「風を切って走るって楽しいね！また今度しようよ！奏お兄さん！」

と、風圧でばさばさになった髪のことにも気にしてないアリイが、興奮気味にそう言ってきた。

《また今度な？》

そんなアリイに苦笑しながら返事をしつつ、野営するために焚き火の用意をする俺だった。

「う……ん……」

《おっ、気付いたか。具合悪いところないか？》

「っ！……」

起きて直ぐに警戒され、少し凹む俺だが自分の姿を考えれば当たり前だと、言い聞かす。

……いかん、余計に凹んだ……。鬱だ。

《そんなに警戒することないんだけどなあ……おい、アリイ。薪拾ってくるから、この子の話し相手してあげてくれ。》

「え、ちよつ、待つ……」

《頼んだぞ。》

アリイなら明るいし、この子のほうにしても特に警戒はしないだろうと思い、少女のことをアリイに任せ、薪拾いをしに行った。

「……あう……あう」

「……………」

《ちよつ、何ぞこの空気？》

しかし、帰ってきて俺を待っていたのは、無言の空間が生み出す何とも言えない気まずい雰囲気だった。それぞれの顔には警戒と困惑、迷いと混乱の表情が貼り付けられ、一言で言えばカオスだった。

何でこんなことになってんだろ？と一人、首をひねる俺だった。

「あ！奏お兄さん！いや、これは、その、あのね？！」

《あゝ。そっか、まだアリイにはハードル高かったか。》

そこでアリイが帰ってきた俺に気付き、何かを弁明しようとしているが言葉になっていなかった。

思い出せばアリイは俺が友達になるまで、友達がいなかったと言っていた。それにあの研究所でも上司と他の研究所員ぐらいいしか話し相手もないし、それも仕事や研究に必要な最低限のものだった。だから、知らない誰かと二人きりにされても困ったことだろう。

「……ごめんなさい。」

《気にすんなって、少しずつ慣れていったら良いんだって。》

「……はい。」

俺の言葉に、申し訳なさそうに返事をした後、小さい声で「次はがんばる！」と言うチャレンジ精神旺盛なアリイであった。

そして、放ってしまっていた少女の方に向き直り、改めて自己紹介から始めることにした。

《さて、置いてきぼりで悪かったな。俺の名前は嵩月 奏って言うんだ。こっち風に言うなら、カナデ タ カツキかな？よろしく。》

「ば、僕はアンリ・フォーメッドって言うんだよ！よろしくね！」

「……………」

《ははは…やっぱ警戒してるよな？うーん、どうしたもんかな……》

俺が自己紹介をするのに便乗し、アリイも勇気を出して自己紹介をした。

だが返ってくるのは警戒のまなざしである。このままでは埒があかないので、どうすれば会話だけでもすることができらるうかと、頭を悩ませていたら少女の方から初めて声をかけてきた。

「……どうして…」

《ん？》

「どうして…私を助けてくれたんですか…」

初対面の自分を何故助けたのか、と聞かれ困った。

《どうして、って言われてもなー…》

「奏お兄さんは優しいから、襲われてるのを見てついつい助けちゃったんだよね」。ここの状況が確認できるなら、どっちに聞いてもよかったしね？

ってことで、多分、特に理由は無かったと思うよ？」

《……何故か最初のところ以外、否定できん…。まあ、そういう事だ。ここがどこなのかと、最近有った大きな出来事を教えてくれたら嬉しいんだけど…》

「……………」

やっぱり黙り^{だんま}だった。まあ、あんなこともあったんだ、今日中に聞かなければならないこともないだろうと思い、今日はここまでにすることにした。

《…無理か。じゃあ、今日はもう休みな。アリイも。周りは俺が見張つとく「私は！」から、さ?》

「私は!…吸血鬼なんですよ!?!なのに、なんで?!」

そこでいきなり少女から声をかけられ、「化け物の自分が怖くないのか」と言われて、さらに答えに困った。

《そんなこと言われてもな。今の俺は悪魔で機械、絡繰りの事ね?だし。》

「その設計者で作製者だし。ついさっき山羊頭の悪魔に襲われてたし。」

《そいつと戦ってたし、最近、散々「非常識」に巻き込まれてるから、吸血鬼って言われても『そーなのか!』程度にしか反応できんし、怯えれん。な?》

「ね。」

そんなことがあったんだから、「実は吸血鬼でした。」程度で驚けと言われても無理なものだ。

アリイもそうなのだろう。それに山羊頭の時と比べると、怖くないと思っても仕方ないと思う。

《そんなわけで、その程度の事は何でもないさ。だから…》

「……………」

《悩み事があると言うと良い。悩みを溜め込むのは体に悪い。

俺たちも色々と普通じゃないしな。ほかの奴らと違って、相談にのれるかもよ？

それに、俺の国の言葉に、こういう言葉があるんだ。「袖触れ合うも多少の縁」てな？だから言ってみ？》

「……つつ！…私は…」

少女はその優しさに心を抑えきれず、涙とともにぶちまけた。自分が元々は貴族令嬢だったこと、数年前に吸血鬼にされたこと、それから地獄の毎日だったこと。他にも、今までに自分に降りかかってきたことの数々を。それを俺たちは、口を挟まず真面目な表情で聞き続けた。

全てを言い切り、息を荒くして黙り込んだ。

《よしよし、今までよくがんばったな。もう我慢なくていいからな。》

そんな少女の頭を撫で、声をかけた。本当に今まで誰にも頼れなかったんだろう。突然一人にされ、怖かったんだろう。そう思うと悲しくなってきた。もし俺の躰が機械でなければ、止めどなく涙が流れ出しただろう。

「う、うあ、うああああ………」

それまで我慢していたものがあふれ出し、くぐもった泣き声とともに少女は泣き出した。その鳴き声は月のない闇夜の中、いつまでも

響いていった。

~~~~~

「……すう……すう。」

「眠ったの?」

《ああ、泣き疲れたみたいだ。そりゃあ、こんなことばかりじゃ  
疲れるわな。この分じゃ、警戒せずに眠るのも久しぶりなのかな  
…》

「…そうだね。」

アリイも一人にいるということが、どれだけ寂しいものかを知っている。だから、俺の腕の中で眠る少女がどれだけ苦しんでいたかわかり自分も苦しいのだろう。

《アリイももう寝とけ。朝になったら起こしてやるから。》

「うん。」

「…奏お兄さん。」

《何だ?》

「僕、この子と友達になれるかな?」

きつと、さつき二人きりになったときのことを気にしているのだろう。二人になったとき、知らない人が怖く何も言い出せなかった。そんな自分に友達ができるのか、それが不安なのだろう。

けど、俺は知っている。アリイがどれだけ明るいかを、優しいかを、そして強いかを。

《なれるさ、言っただろ？」「友達になりたい相手に、「友達になってください。」「って言って、相手が同意したら、友達だ」ってな。言い出す勇気を身につけたら、友達を作るのは簡単にできることだ。アリイは強い子だ自信を持て。きつと出来る。だから、がんばれよ？》

「…うん。がんばる！」

俺の言葉に笑顔とともに小さく拳を作り、自分を励ましてから焚き火で暖をとりながら、自分の白衣にくるまって眠った。

そんなアリイと

眠る少女をほほえましく見まもり、周りを警戒していると空が白んでいき。朝になった。

~~~~~

《…朝か、ほら起きろアリイ。》

「うん、…おはよう…ぐう。」

「…うん。」

まだ寝ぼけてるアリイを起こそうとしていると、腕の中で寝ていた少女が目を覚ました。

《おっ、こっちも起きたか。おはよう。》

「…おはようございます。」

「あの、昨日はありがとうございました。」

朝の挨拶をした後、少女は恥ずかしそうにいつてきた。やはり吸血鬼だの何だの言っても、心は見た目道理の少女なのだ。泣いているところを見られたのは恥ずかしいかったのだろう。

《なに、人はみんな持ちつ持たれつ生きてんだ。だから、気にすんな。》

「奏お兄さん、くさい。」

いつの間に起きていたアリイに茶化された。

《なんだと！アリイ、人がいいこと行ってるのに水を差すなよ！》

「だって〜。」

《だって、じゃありません！》

気付くといつもの掛け合いが始まっていた。相手に気付かせずに自分のペースに持ち込むとは、アリイ恐ろしい子？！（あなたが単純すぎるだけです。by作者）
なんか電波にも馬鹿にされた？！

《俺で遊ぶな！そして接続詞が違う！！…あゝ、話が進まん。》

「う、ごめんなさい、わたしもつい。」

謝ってくる少女だが、この子は何も悪くない。そう悪いのはそこに
いる元凶（ドジッ子小悪魔系天然マッド）なのだから。

《気にすんな。悪いのはアリイだ。で、昨日の話に追加のことなん
だが、君がよかつたら一緒に旅をしないか？》

少女は突然のことにぽかんとし、俺の言葉にブーイングしていたア
リイもこの発言に真面目な顔に戻った。

「えっ……」

「旅するの？」

《ああ、この子でこの扱いだ、俺はもつと扱いが悪くなるだろうか
ら、長いこと同じ所にはおれんだろ。》

昨日の男たちからするに、ここは中世ヨーロッパと同じ程度の生活
水準に価値観なのだろう。なら、吸血鬼のこの子よりも見た目が厳
つい俺は、より厳しいことになるだろうと推測していた。

この考えを後ろ向きというやつもいるかもしれないが、常に最悪を考
慮しながら動くぐらいがちょうどいい。

「……………」

《それと、もう一つ。》

「なんですか？」

《ほら、アリイ。》

「えっ？えっ？！もう？！」

《がんばれって言ったろ？》

そっつい、アリイの背を押す。アリイは何かわかってすごく緊張していたがこれも試練だ。

「？」

「う、えと、あの…僕と…よければ、僕と、と、友達に、なっ、てください。」

「……………」

アリイが自分の中にある、ありったけの勇気を少女に向け、しどろもどろになりながらも振り絞って言った。そして少女はまたも驚いた表情を顔に貼り付け、沈黙した。

「あ、あの、嫌だった？」

「えっ？！そうじゃなくて？！吸血鬼になってから、そんなこと言われたの初めてだったから…驚いて…。」

沈黙のままの少女に不安になり、おそろおそろ聞いたところ、少女は慌てて弁解し出した。

しかし、双方これでは埒があかないと思い、助け船を出すことにし

た。

《お返事は？》

「私からもお願いします。」

「っ！やった~~~~！！！」

その答えに、アリイは全身を使い、喜んだ。俺と友達になったときは俺からなろうと言ったので、今回、自分の力で友達を作ったことはアリイにとって大きな前進になっただろう。

《よかったなアリイ。追加で俺ともいいかな？》

「はい。」

《ありがとう。アリイ、もう一回自己紹介するぞ。》

「うん！僕の名前はアンリ・フォーメッド！アリイって呼んでね！」

《改めて、俺は嵩月 奏。嵩月が姓で奏が名前だ。奏って呼んでくれ。》

「……ありがとう……。私はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェルです。エヴァって呼んでください。これからよろしくお願いします。アリイちゃん、カナデさん。」

それを聞き、周りに気付かれないように心の中で《なんですとー！ー！ー！ー！》と叫んだ俺を誰が責めることができようか！いや出来ない！！反語。（混乱中です。）

…おつ、じつど。ここは「ネギま」の世界だったのかよ…

「奏お兄さん、奏お兄さん。」

《な、なんだ？》

「エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェルって、僕
んところにもいる。700年近く生きてる700万ドル超えの懸賞
金首なんだけど…」

先ほどの喜びと一転し、驚きと困惑が渦巻いた声で声をかけて
くるアリイだが…俺はおまえの言葉にさらにびっくりだよ！
さらに驚きの新事実、実はあそこも「ネギま」の世界で、しかも1
00以上先の未来だったみたいだ。

《……何がどうなってんねーーーーーん！！！！》

何故に関西弁？

「あわあわ。あわあわ。」

歴史の偉人に出会い、慌てるアリイ。

「……？」

そして、渦中の人は訳がわからず首をかしげながら一人ぼつんとし
ていた。

これから俺たち、どうなっちゃうんだろう……

~~~~~  
小話

「そういえば、あの時あの人たちをこかしたのはどうやってたんですか？」

《うん？それはだな、この籠手の先から出した糸で引っかけてんだ。質問してたのは、こいつを出すための時間稼ぎでもあったわけだ。アリのための補足説明するなら、山羊頭の場合は「白銀」で空間を斬って、別の角度から山羊頭に空間切断をぶち込んだんだ。》

「奏お兄さんの躰は言わずもがな、この籠手を作ったのも僕なんだよ！すごいでしょ。」

「へえ、アリイちゃんはすごいんですね。」

「うんうん。すごいでしょ！って奏お兄さん、何でそれ出しっぱなしなの？」

《一応、周りの警戒用に広げてる。》

「そんなことしなくても「知覚領域」を広げとけばいいのに。」

《今日のご飯捕獲用も兼ねているんだが？お、引っかったか？》

「僕の言葉は忘れてがんばってください。」

「ふふふ……」

小話2

「奏お兄さん、奏お兄さん。」

《どうした？》

「さっきは真面目な話だったから突っ込まなかったけど、「袖触れ合うも多少の縁」は間違ってるよ？正しくは「袖振り合うも多生の縁」で、意味は「全ては理由のない「偶然」ではなく、縁によって定められた「必然」である。」って意味だよ？」

《まじで！？》

「…やっぱり、奏お兄さんの大船には穴が開いてるね。」

## 第五話 闇の中の光。（後書き）

と言うわけで、エヴァルルートへ途中下車の旅へ入りました。

人の心を文字にするというのも難しいものです。そして、人が増えると会話ばかりで、地の文が減ってしまいそう…

いろいろと無茶しますが、これから生暖かい目で見守ってやってください。

今回の用語・補足説明はお休みです。ただ「これは？」と思ったときは感想などに書いてください。順次、説明していきます。

では、次回もよろしくお願いします。

p.s.

武装の件ですが、これまでの流れで「もしかして、あれか？」とあたりを付けた読者の皆様、おそらく当たってると思います。

第六話 旅の始まりはどたばた。  
(前書き)

これからが三人の旅の始まりです。

## 第六話 旅の始まりはどたばた。

「はー、そうだったんですか。」

「うん、そうなんだよ。いやー、僕もまさか自分でこんな経験するなんて、思いもしなかったよー。」

《ああ、二回目の俺もびっくりだ。こんなことになるって、どんな確率だろうな。》

あの後、俺たちが驚いた理由をエヴァちゃんに色々説明することにした。アライが800年ほど先の未来からきた人間であること、俺が別の平行世界から来た人間だということ、この躰になった経緯、そして俺の元の世界でこの世界が漫画になってることを。

だが、最後のを言っても二人は特に反応を示さなかった。というか「そうだったんだー。」「漫画ってなんですか?」へー、未来にはそんな物があるんですね。おもしろそうです。「というほのぼのしたものだっただけ。」

しかし、アライは俺の記憶を覗いたはずなのに、何で知らなかったんだろうか?ふと思いついてみたら…

「僕も全部は見えてないからね。一番最初に出てきた記憶が、飛ばされる直前の記憶と『アスラクライン』の内容だったんだよ。けど、今考えれば何で最初の記憶が『アスラクライン』だったんだろうね?もしかして、奏お兄さんって思ったよりおたく度数が高かったの?」

《……もう何も言わん。》

…俺ってそんなにオタクだったんだろうか?だんだん自信なくなっ

たきた…。

~~~~~

二人を肩に乗せ、エヴァちゃんに指針をさしてもらいながら歩くこと二日ほど、ついに大きな町にたどり着くことが出来た。道中三人で他愛のない会話をしながら歩いていたので暇になることもなく、襲ってきた狼や猪などを返り討ちにして食べていたので食料にも困らなかった。

《さて、大きな町に着いたな。》

「これからどうするんですか？」

《そうだな。これからの旅に必要な支度と食料と水を二人分に地図、出来ればアライ用のこの時代の服に、馬車の幌にも使えるような大きな布。こいつらを手に入れることだな。》

「最後のは何に使うの？」

《俺のマント。機能的には必要ないかもしれないけど、旅の道中で汚くはなりたくないからな。》

「あははは、そうだね。奏お兄さんの躰を洗ったり、整備するのは僕になるからね。僕もその方がいいかな？」

きれい好きと言うわけではないが、俺としても、自分の躰が汚いというのは嫌だ。そうなったとき、俺に出来るのは大雑把に装甲を拭くことだけで、後の細かい部分はアライに頼むしかなくなる。俺の

この大きな軀を洗うのは一手間だろう。そうはならないようにしたい。

《問題はどうかやって手に入れるか、だけど…。》

「私はこの間見つかりましたから、連絡が回って騎士団や傭兵たちに警戒されてると思います。」

「それじゃあ、僕が一人で行こうか？」

消去法でいくと、俺は行けることは行けるが格好が目立ちすぎてダメ、エヴァちゃんはそもそも真祖で教会関係者や、騎士団の人たちに見つかる就非常にマズイのでやめておいた方がいい。となると、町に入れるのは残るアリイだけなのだが…

《不安だ、果てしなく不安だ…。》

「むう…。その言葉はどういう意味？」

「あははは…、アリイちゃんでも大丈夫だと思うんですけど。たぶん…。」

本気で不安がる俺に、不満そうに頬を膨らませるアリイ。そこにフオローを入れるエヴァちゃんだが、自信なさげである。

《まあ、それ以前に金がないと意味がないんだけどな。この時代の通貨は金貨とかだっけ？》

「はい。けど、私もお金は持ってないんです…。」

お金を持ってないので問題外だったりする俺たちだった。お金を作るうにも町に入らなければ作りようがない。今までに獲った猪や狼の毛皮を行商人に買い取ってもらう手もあるが、たかが数枚だと金額も期待できない。他に金目になりそうなものは俺の武装ぐらいだけが売れるつもりはない。

《だよなー。となると悪い気はするが、夜に店からこっそりと拝借してくるか。》

「盗むの？」

《失敬な、借りるだけだ。物の寿命がつきるまでな。》

「それは盗むって言うんじゃない……」

俺の遠まわしな言葉にストレートな意見をぶつけてくるアリイと、ためらっている真面目なエヴァちゃん。だが、そこは自分の心証が悪くならないように言い直す。

《これも、俺たちが生きるための必要悪、そう人は皆生きるために何かしろの悪を背負っているものだよ、エヴァ君。》

「建前は置いといて、本音は？三下風に！」

《ふへへへへ、俺たちのためにさっさと出しなあ。今なら怪我をしないですむぜえ。ぐっへっへっへっへ。》

「うわあ、エヴァちゃん！三下だよ。三下がいるよ。ああいうのについていいたら、だめなんだよ。つまり、奏お兄さんについて行っちゃ駄目なんだ！」

「は、はいっ。わかりました！」

《振ったのそつちなのにそんな反応？！酷い、酷いぞ？！そして、エヴァちゃん！アリの言ってることを全部鵜呑みにするな！？》
アリの指示通りにしてみたら、まんまと罠にかけられ勝手に三下のレッテルが貼られてしまった！？くっ！このままではエヴァちゃんがアリの色に染められてしまう！今後、対策をとらねば。

「で普通に言っと？」

スルーされた！？…まあいいこの程度などいつものことだと思い、改めて言い直した。

《非常に心苦しいですが、自分たちの方が大切なので、いただいていきます。》

「なんか、すごく自分勝手な気がしますね…。」

《それでいいんだよ。自分の大切なものを守るので精一杯なんだ。悪いが、他人のことは気にしてられん。》

確かに、自分勝手だ。出来ることならきつちりとお金を作って表の方から入りたいが、そう時間があるわけでもない。エヴァちゃんのこともあるので、なるべく早く別の地に移っておきたい。

…まあ、次にもしもここを訪れたら利子も付けてきつちりと払うつもりだが。

「とか言いつつも、良心の呵責に苛まれるのが奏お兄さんなんだろう

うけどね?」

《うつ…》

「図星だね。」

「図星ですね。」

《うつ、うるさい。夜まで時間つぶすぞ。》

「はい。」

~~~~~

「と言うわけで拝借してきました。わ、ぱちぱち。」

「あ、あれ?あれあれ?」

《「キ。グクリム。ン」!全ての行程は吹き飛ばし!『結果』だけだ  
!!この世には『結果』だけが残る!!》

「え、え、ええ?!!」

いつの間にかに全てが終了しており、また俺たちのノリについて来れないエヴァちゃんが混乱しているがスルーさせてもらおう。これも試練だ!がんばれエヴァちゃん!

そんなこんなで旅支度を済ませた(よい子は絶対にまねしちゃダメだぞ!)俺たちはマントを羽織って、旅へと出ようとした。

《さて、装備一式もそろったし、行こうか。》

「うん！（ええー?!）」

「ってちよつと待てー!!」

いざ旅立とうとしたところを熊のような大柄の男に呼び止められてしまった。

《何だよ。折角人が『立つ鳥跡を濁さず』の精神ですっぱりさっぱり気持ちよく旅立とうとしてるのを邪魔すんなよ。無粋にもほどがある。》

「てめえ…、周りの状況が見えてないようだな！」

町の中の大きな店に旅支度を盗み…ゲフンゲフン…拝借しに入り、出てくると俺たちの周りを二十人ほどの殺気立った男たちが囲んでいた。面倒なので見えてないふりをしてスルーしようとしたのだが、そうは問屋が卸さないらしい。（ちなみに、こいつらに囲まれてるにもかかわらず、普通に掛け合っているのもエヴァちゃんが混乱している理由の一つだったりする。）

最初、こいつらはエヴァちゃんの情報を聞きつけて来たのかと思っただが、それにしてもエヴァちゃんに対して無反応すぎる。それに、向こうも俺たちを最初に見たとき驚いていたので、妥当な理由としてはこの店に押し入りに来たところ、俺たちがいたと言うところか…。

全く、旅の初っ端からこんなのに巻き込まれるなんて、ツイてない。そう思い、気怠げに熊男の声に反応した。

《見えてるよ、てか真夜中に叫ぶな。そして用があるならさつさと言え。こちらとら急いでんだ。こんなところでもたもたしてて、もしも見回りの兵士とかに見つかったらどうしてくれんだ。この熊。》

「ぐっ！…俺はジード、『豪腕』のジード様だ。そして俺たちはここいら一帯を縄張りにしてるジード盗賊団。本当は後ろの店に用があつたんだがな、ついだ。おい！お前！命が惜しけりや、身ぐるみ全部とそこの女二人を置いてとつと逃げな！すぐに置いてくなら」

《断る。》

あまりにもふざけた要求だったので脊髄反射の域の如く素早い反応をしてしまった。その早さに熊男も呆然だった。言つた本人もびっくりだった。

「てめえ、命が要らんようだな！野郎どもこの命知らずを始末しまえ！！ただし嬢ちゃん二人には傷を付けるな！上玉だからな、高く売れる！」

『うおおおおお！！！』

《仕方ない。アリイ、エヴァちゃんを守っていてくれ。エヴァちゃん、ちゃんとアリイの後ろにいるんだぞ？》

「わかつたよー！」

「は、はいっ！」

真夜中だというのに、大声を上げながら襲いかかってくる熊男たち

に嘆息して、アリイとエヴァちゃんに指示を出しながら前に進み出した。

《さてと、やるか。これだけ騒がれちゃあ、もう隠れるのも無駄そうだから派手に行くでしょう。来てくれ「アエンカ亜鉛華」。  
そして…》

その呼びかけに応え両手を影が覆い影が晴れたとき、その両手には白いグローブのような大きい籠手が装備されていた。それだけに止まらず真価を発揮すべく、詠唱を開始した。

《——闇より遠き地平より出でし》

その白い籠手から伸びるのは、

《——其は、科学の絲が砕きし理ことわり!!》

全てを爆砕する系!

俺の詠唱に応え白い籠手がさらに輝き、その能力を解放放つ。

「な、なんだありや?!」「どっから出したんだ?!」

「怯むな馬鹿野郎ども! たかだか手が大きくなっただけじゃねえか! そんなもの、はったりに決まってる!!」

「そ、そうだ! いくぞ!」「おおお!!」

俺の手が大きく変貌したのを見て、怯んだ男たちが熊男・ジードだっけ? が喝を入れると戦意を取り戻し、向かってくるのだが、この「亜鉛華」がただの籠手と思うなよ?

《ふん！》

気合いと共に振るった「亜鉛華」の指先のそれぞれから紅い糸が飛び出し、向かってきた男たちの半数近くを拘束した。

「なんだこりゃ？！糸か！」「それがどうした！こんなもん、切つてやる！」

「切れた！やつぱり、はつたりだ！」「いけえええ！！」

糸に拘束され一瞬驚いた男たちだが、直ぐに糸を切りにかかった。そして、糸が簡単に切れるとわかると、味方に巻き付けられた糸を切り、再度こちらに突貫してきた。なるほど、反応の早さからそれなりに戦闘経験を積んでそうだが、その反応は不正解だ。

《死なん程度には手加減をしておいてやった、…つもりだ。》

ドガアアアン！！

その呟きの数瞬後に糸が切れた場所から導火線の如く火線が伸びそれが体に到達したとき、拘束されていた男たちが轟音をあげながら炸裂した。

さすがに殺すのはどうかと思い、「亜鉛華」に込める魔力を少なくしたつもりだが、意外と激しい爆発に驚いた。…生きてるかな？

「ぐわああ！！」「ぎゃあああ！！」

ほっ、何とか生きてるようだ。「亜鉛華」の糸を巻き付けられている男たちは声を上げることも出来ないぐらいに黒こげになっている

が、ピクピクと痙攣してるから死んではなさそうだ。そして、その爆発に巻き込まれた男たちも予想外なダメージに戦意を喪失する奴らが続出した。

《さて、ごきげんよう?》

だが、俺たちを襲おうとしたんだ、この程度で逃がすつもりはない。残った全員に糸をくくりつけるべく糸を伸ばし、別れの挨拶をかける。

「ひいひいひい?!」「に、にげろおおお!!」

糸から逃れようと逃げ出す男たちだが、逃げ切れるわけもなく全員あえなく拘束される。そして、「亜鉛華」から糸を切り離し、一人残らず爆破する。

ズガガガアアアン!!

《部下はいなくなったみたいだが、どうする?逃げ出すか、倒されるか、速やかにどちらかを選べ。さっさと、ここを離れたいんでな。》

「てめえ、魔法使いだったのか?!通りで強気だったわけだ…。」

下っ端を全て片付けてから、ジードに視線を向ける。このまま逃げ出してくれればうれしかったのだが、どうやらまだまだ逃げる気にはならないようだ。それに、どうやら俺のことを魔法使いと勘違いしている。まあ、違うんだが他の人から見たら同じようなものかな?

《俺は魔法使いじゃないんだが…。》

「そうかい！それじゃあ今度は俺が『豪腕』って呼ばれる由縁を教えてやるよおお！！」

《ぐうつ！》

俺の呟きを無視し、ジードが鉞を振りかぶり真正面から突っ込んでくる。流石に盗賊団の頭領をしているだけあって、下っ端たちとは比べものにならない速さをもっている。その速さを殺すことなく、大上段から振り下ろされた一撃を両手を交差して防いだ。しかし、その一撃で足場の石畳が悲鳴を上げ、蜘蛛の巣ようなひびが入る。

「どうだい！この力！俺はこの強大な腕力と鉞で、あらゆる敵を真つ二つにしてきた！だから俺はこう呼ばれている！『豪腕』とな！！」

《たいした馬鹿力だ！『豪腕』って言われるだけはあるかもな！けど、その程度！》

確かに威力は高いし、動きも他の奴らと違いかなりの速さだが、見えないほどではない。これぐらいなら十分対応できるだろう。

鉞を弾き、少し距離を置いたところで打ち合う。速い展開の攻防になっっているので、「亜鉛華」の糸は使えない。となると俺は無手なのだが、身長が高いので懐に入られるとやっかいなのである。幸いむこうは武器を持っていて、それを手放して懐に入ってくることはなさそうなのでちょうど良い距離で戦えそうだ。

再び振り下ろされた鉞を、今度は真正面から受けず左で払いながら右を突き出す。しかし、ジードもそれに反応し紙一重で避け、次の一撃を放つ体勢をとる。下段からの攻撃を出される前に手刀を打ち込むものの鉞の柄で押さえられ、鏝ぜり合いになる。だがそれも一

瞬であり次には弾かれるように離れ、また攻防が再開される。そのようなぶつかり合いが数合続いた後、それまで保たれていた均衡が傾いた。

《ちえちえちえすと!!》

「ぬううう!!」

気合いと闘気を込めて拳を作り、正拳の嵐を降らす。最初の内は対応していたジードだが、だんだんと追いつかなくなり、ついにはたまらず距離を開けた。そこに弓のように体をしならせ、力を溜めこんだ蹴りを打ち込む。  
これもまた鉞で防がれるが踏みとどまらず、二メートルほど後ずさりようやく止まった。

「ぬおっ!まさか俺が押し返されるとは…、悔しいがどうやら実力はお前の方が上ようだ。だがな…そっちの嬢ちゃんたちはどうかな?」

「うわあ?!」「きゃあっ!」

「へっへっへっ、どうやら形勢逆転のようだな。おい、その物騒な籠手を外して降伏しな!」

ジードが声を上げた瞬間、アリイとエヴァちゃんの後ろからいきなり男たちが現れ、二人を拘束した。

どうやら最初に仕留めたので全員でなく、まだ伏兵を隠していたのだ。そして、自分の力だけで勝のは厳しいと思い、今まで隠していた伏兵を使ったようだ。二人を捕まえ得意げな笑みを顔に貼り付け、降伏を命令してくるジードだが、俺たちはそれを余所目に余裕の構

えだった。

《全く、アリイなにやってんだ…。戦闘中は「知覚領域」が狭まるから頼んだってんのに。》

「えへへへ、ゴメンゴメン。油断したよ。」

「あ、あの大丈夫なんですか？」

「大丈夫、大丈夫。」

「チッ、余裕をかましがって。おいっ！足でも刺してやれ！そうすればその余裕もなくなるだろうよ！」

人質を取られてるにもかかわらず、余裕で普段通りの会話を交わす俺たちに苛立ったジードが最初の命令を撤回し、アリイたちを傷つけるように命令する。すかさず命令を実行しようとする手下の男たちだが、その命令を行動に移すことは出来ないだろう。なぜなら、アリイたちはただの一般人ではないのだから。

「デイ・デイス・デイサイ・デイサイプル。光<sup>ルクス</sup>よ！」

「な、なにい？！あの嬢ちゃんも魔法使いだっただのか？！」

男たちはアリイが出した閃光に目を焼かれた。闇の中に目が慣れていたジードたちに対しての効果は抜群だった。

まだ離れていたジードはともかく、近距離で食らった手下たちは堪ったものではなく悶え苦しんだ。

「カントゥス・ベレークス  
戦いの歌！やっ！」

「えいつ！」

その隙を見逃さず、肉体強化の魔法をかけたアリイと真祖の吸血鬼としての身体能力を解放したエヴァちゃんが、男たちの拘束を振り解き一撃の下に沈めた。

「ちいい！てめえだけでも！くらええええ！！！」

ヤケになったジードが特攻してくるが、それももう遅い。

《残念。あんたはもう動けんよ。》

「こ、これは？！いつの間に？！」

気付けばジードの体は俺の左手から出ている何本もの紅い糸に縛り付けられていた。それはアリイの閃光に驚いている隙に引き出した糸であった。

これでもう逃げることも出来ないのだが、このまま爆破するだけでは俺の気が済まない！

《さっきの間に。それよりも、よくも二人を傷つけようとしてくれたな？あんた頑丈そうだし、今考えついた俺の技で沈めてやんよ！！》

拘束している手とは別の手に、多大な魔力と気合いを込めて拳を作りその上に糸を巻き付け、腰溜めに構える。そうしているうちに糸を巻き戻し、猛スピードでジードをたぐり寄せる。

「ひいい！！！」

ジードはこれから自分に降りかかる衝撃に恐怖を抱き悲鳴をあげる。

《はあああ！！「爆碎正拳突き」！》

ズガアアアーン！！

猛スピードで向かってくるジードに、全力を込めた右正拳突きがカウターのタイミングで決まり、同時にそれぞれ巻き付けられていた導火線に点火し巨大な火柱が立ち上る。

《ふうう、終わったか？死んでは…ないみたいだな。思いの外、手こずったな。

それに折角のマントが…。》

相手が沈んだのを確認し、闘気を散らす。まさか盗賊団の掃討にここまで時間がかかると思わなかった。

おまけにやり過ぎてマントが少し焦げてしまい、大いに凹んだ…。

「それにしても奏お兄さん、派手にしちゃったね。そこら辺ぼろぼろだよ。」

アリイがそう言うのも仕方がない。「亜鉛華」の爆発に、俺とジードの戦いの余波で石畳はそこら中が割れてしまっていた。

「そうですね。まさか、あの系が爆発するとは思ってませんでした。けど前の時、私あれで釣り上げられてたんですよ…、もしかしてアレも爆発するかもしれないかったですか？」

そつえばそうだったけ？…ま、まずい。

《…むっ！さすがに騒ぎすぎたか！騎士団ばいのが近づいてきてるぞー！さあ逃げよう！》

走って誤魔化すことにした！いいか、これは決して逃げてるわけじゃないんだ！

逃げているにしても騒ぎを聞きつけ、駆けつけてくる騎士団からだ！！

「あっ！逃げた！待ってよ。」

「やっぱり危なかったんですか？！」

~~~~~

町が見えなくなるまで走りきり、探索モードの「知覚領域」に何も引つかからないところで足を止めた。

《さて、無事に逃げ切れてよかったよかった。これでやっと旅に出れるな！》

「置いていくなんて酷いです！」

「そうだよそうだよ！私たちじゃなかったらついて行けなかったよ！」

《まあ、気にすんな。》

置いていったことに不満をもらすアリイたち。よしっ！「亜鉛華」のことは何とか誤魔化せ…

「これで誤魔化せたと思わないでくださいよ？」

なかったクマー？！どうする！？

《「「……………」」》

《ぷっ》「ぷぷっ」「ふふふ」

しばらく沈黙が続いたが、どこともなく笑いが漏れだし、ついには抑えきれずに大声を出して笑い出した。

《「「あはははは！」「」》

いろいろと格好の付かない旅の始まりだけど、これが俺たちらしくていいじゃないか。アリイとエヴァちゃんもそう思ったのだろう。俺たちはやっと、旅の出発点に立つことができた。これからの道中に思いをはせながら、二人に声をかけた。

《さあ、行くかっ！》

「「うんっ！（はいっ！）」「」

~~~~~

小話

「奏お兄さんって武術、出来たんだね。」

《ああ、道場に通ってたって訳じゃないんだがな？》

「へー、じゃあカナデさんは何の武術を修めてるんですか？」

《修めてるってほどじゃないが、空手と柔術、ムエタイ、それに中国拳法だな。どれも見よう見まねだ。》

「四つもですか?!」

「何でまたそんなにばらばらなの？」

《小さい頃に住んでた所の近くの道場でやってたんだ。門下生の人  
がやたらと『死ぬ』とか『いつそのこと殺せ』とか『あぱぱ  
ぱぱ』とか言ってたけどな。》

「…そこ大丈夫なの？」

「大丈夫じゃない気が…。」

《まあ、大丈夫なんだろう。それでちよくちよく遊びに行ったら基礎  
ぐらいは覚えたんだ。見よう見まねの正拳突きを見せて、お師匠さ  
んに褒められたときは門下生の人が何故か凹んでたな？そのあと他  
のお師匠さんに連れてかれて、動かないようになって帰ってきたけ  
ど。》

「「（かわいそうに…）」」

小話2

《そういえば、あのジードって奴は魔力を使ってなかったのに、何であんなに強かったんだ？》

「まりよく？」

「それは多分『気』って奴だね。」

《「『気』？」》

「説明するとね？生物には『魔力』と『気』の二つの力が宿ってるんだ。

『魔力』が精神エネルギーもしくは世界に満ちる力、『気』が身体エネルギーもしくは自分に満ちる力って考えてくれればいいよ。」

《「ふむふむ。」》

「それで、『魔力』も『気』もほとんど一緒なんだけど、それぞれ特性上『魔力』は外に放出するのが向いていて、『気』は内で強化するのに向いてるんだよ。この性質からか、通常、『魔力』と『気』の同時運用をするとそれぞれが反発し合い、余計に弱くなるわけです。」

「なるほどです。」

《じゃあ、同時運用は無理なのか？》

「いやいや、無理じゃないんだけど難しすぎて、ごく一部の人が長年の研鑽の末にたどり着ける境地とされてるね。名称は『咸卦法』  
シユンタクシス・アンディケイメノイン アルデマーアート

『気と魔力の合一』で究極技法とも言われるね。

効果は肉体強化、物理・魔法防御、加速効果の強化、もちろん単に『気』や『魔力』でのパワーアップよりも遙かに強化されるね。それに耐熱、耐寒、耐毒その他諸々の効果も得られるんだよ。」

《…なに、その鬼性能。》

「すごいですね。」

「まあ、使えるのは本当にごく一部の人だけ、だけどね？」

~~~~~

小話3

「あの盗賊団さんは少しかわいそうでしたね。ほとんどの人が黒こげになりましたし。」

《そ、そうかな？意外と手加減できたと思うんだけど…。》

「そうだよね。本来の威力だったらあの人たち、骨も残ってるかわからない状態になってたはずだしね。奏お兄さんはうまいこと手加減出来たと思うよ？けど、いつの間にあんなに使えるようになったの？」

「そ、そうだったんですか。すみませんカナデさん。」

《お構いなく。それはだな山羊頭との戦いの後、なんとなく使い方がわかった気がしたんだよ。》

「ふうん。そうなんだ。」

第六話 旅の始まりはどたばた。(後書き)

と言うわけで、旅支度でした。

これ書いてて思ったんですが、もしかして奏君ってかなりのチートプレイヤー？

奏君の体術ですが、作中で言ってるように小さい頃に遊びに通っていた道場で真似ながら覚えたものです。ですので、基礎が他の人より出来てる程度です。

p . s .

次からの話は少し短くなるかも？です。

用語・補足説明

「闇より遠き地平より出でし―其は、科学の絲が砕きし理」
いとむら

「亜鉛華」の詠唱がなかったので、オリジナルで付けたものです。

「キ。グクリム。ン」

とある漫画に出てくるイタリアンマフィアのボスのスタ。ド。

この世の時間を十数秒「消し去る」ことが出来る。消し去った時は、他人には認識できない。「過程」は消し飛び「結果」だけがのこる。具体的に言つと、食べようとしていたチョコを知らないのうちに口に含んでいたりする。これは消し飛んだ時間の中で行われた行動の結果であり、過程を認識しないということである。
ここではギャグなので上記の物とは何も関係ない。

「ディ・デイス・ディサイ・ディサイプル」

アリの魔法始動キー。

学生時代に作った物で、「自分はいつまでも学び続ける、弟子のよ

うな者だから」という意味で「ディサイプル」（弟子・学ぶ者）を使った始動キーにした。

「爆砕正拳突き」

奏君が即興で作った必殺技。

「亜鉛華」の糸を相手と自分の拳に巻き付け、相手をたぐり寄せることのでカウンターの右正拳突きをぶち込む。それと同時に、巻き付けた糸を点火、爆破し相手に大ダメージを与える。

ぶっちゃけ、魔力を込めて爆破するただの正拳突き。

第七話 エヴァちゃんと進路会議。(前書き)

今回、話は進みません。

第七話 エヴァちゃんと進路会議。

side エヴァ

どうもエヴァです。今私たちはどこに行くとも目標を決めず、気の赴くままに旅をしています。

カナデさんがその大きな肩に片方づつに私たちを乗せてくれているので楽ちんです。

そんな旅の道中、私たちが何をしているかというところ……

「それじゃあ、魔法の練習をするよ？」

「はいっ！」

『魔法』の練習です。

アライちゃんが言うには、真祖の吸血鬼とは『魔力』が多く、身体能力も高い魔法種族の中でも最強種とも呼ばれるほどのポテンシャルを誇る存在らしいです。そんなこともあり私の魔力量は、魔法使いとしても破格らしいです。

けど、今の私はその魔力の多さを生かし切れていないらしく、強さも一般男性より少し強いぐらいです。旅をするからには、これからも危険な目に遭うことはたくさんあります。だから自分で自分の身を守るようになるため、『自分を大切な物を守るための力』を持つため、カナデさんに勧められてアライちゃんに『魔法』を習うことにしました。

「まずは魔力の流れを感じるための訓練をするよ」。この魔法発動

体になる初心者用の杖を持ってプラクテ・ビギ・ナル アイルデスカット 火よって唱

えるんだよ？ 実演するから見ててね？ プラクテ・ビギ・ナル アイルデスカット 火

よ！」

アリイちゃんがそう唱えると、杖の先に火がとりました！何も無いところから火が出るなんてすごいです！

吸血鬼の私が言うのもなんですが、おとぎ話の中だけと思ってたものののに、本当に使えるなんてすごいです！わたしもこれから使えると思うと、すごくわくわくします！

「はい。エヴァちゃんどうぞ。最初はなかなか火が灯らないと思うけど、辛抱強くがんばってね？」

「ぶらくて・びぎ・なる あーるですかと…ですね。すー…はー…わかりました！やってみます！」

ついに、私の番が来ました！ああ、ついに私も魔法使いの仲間入りなんですネ！

失敗しないように呪文をもう一回確認して、深呼吸を一度。心を落ち着かせて…いきます！

「ぶらくて・びぎ・なる あーるですかと！」

「…でないです。」

アリイちゃんみたいに杖に火が灯りません…。呪文も間違えてないに出ないなんて…、私には才能がないんでしょうか…。

《ははは、気落ちしなくて良いよエヴァちゃん。さっきアリイが言ってただろ？何回も練習しなきゃ、なかなか出来ないもんなんだよ。》

「うつうつ…。カナデさんはできるんですか？」

カナデさんはそう言ってくれますが、やはり出来ないと落ち込んでしまいます…。そこでふと「カナデさんはどうなのかな？」と思いついたので聞いてみることにしました。

《出来ん！というか、やってみたことがない。》

「なんでですか？」

私はそのことを不思議に思いました。だってカナデさんは私に『守るための力』を持つことを勧めた人だからです。

そんなカナデさんだからこそ、手に入れられるものがあれば手を出すと思っていたからです。

特にカナデさんは、私と同じくかなり大きな『魔力』を持っているはずなので余計に不思議に思いました。

そんな私の疑問にアリイちゃんがどこからともなく取り出した眼鏡を付けて説明してくれました。アリイちゃんは説明をするときは必ず眼鏡をかけています。そのことについて、以前聞いてみたら「様式美だよ。」と言っていました。…奥が深いです。

「その疑問には僕が答えるよ」。奏お兄さんはの躰と武装は、僕が造った特別製でね？普通の人が使えらる魔力じゃないから、扱うのがすごく難しいんだよ。それを考えると、この間の盗賊との戦いもかなりうまく戦えてたんだよ。」

《というわけなんだよ。いや、この体の魔力操作が難しいのなんの、何回も練習してやっと能力が使えるようになったんだ。まだまだ下手で、魔力のロスがありすぎて困りもんだけどな。

まあ、初級魔法程度なら出来ないこともないだろうけど、まだ細か

い制御が出来ないから、その杖の先から火柱が上がるか火がでないかの二択だと思う。》

「そうなんですか。…私も杖に火が灯せるように、がんばってみます！」

意外でした。カナデさんはすごく強くて物知りなので、何でも出来るものだとばかり思っていました。

出来ないことを何度も練習して、何度も努力を積み重ねて来た結果が今のカナデさんだとわかりました。

私も負けてられません！こんなことであきらめません！

《おう、がんばれよ！エヴァちゃん。》

「そうだよ。練習あるのみだよ。」

「はいっ！」

私は今、とても幸せです。十歳の誕生日に吸血鬼にされてからの日々は地獄でした。それまで城で暮らしていた私には一人で生きる術がなかった。この体では死ぬことも出来ず、誰も助けってくれなかった。

そんな私に希望をくれたのがカナデさんとアリイちゃん。

二人があの日、私を助けてくれなかったらまだ私は絶望の中にいたことでしょう。

だから、私にとって一番大切なものは三人でいるこの時間です。

優しいカナデさんがいて、いたずら好きなアリイちゃんがカナデさんにちよっかいを出して怒られる。このどたばたしていて騒がしくも楽しい、居心地の良い時間がとても好きです。

《ぬわあああ！出来ておめでとうだけど、エヴァちゃん魔力込めすぎ！火柱が！マントが燃えるー！！》

「あわわわわわー！ごめんなさいー！！」

「あつはつはつ！キャンプファイヤーみたいだね！」

《笑ってる場合かー！》

出来ることなら、この楽しい時間がいつもまでも、本当にいつまでも終わりにく続きますように…。

side out

~~~~~

しばらく歩いくと大きな湖があつたのでその畔で休息をとることにした。そして、ちょうどよかったのでこれからの進路会議をすることにした。

《さて、これからの指針を決めるぞ。》

「はい。」「はいはい。これからどうするの？」

《基本的にはぶらぶらと動き回りながら、時々、修行とお金稼ぎをかねて傭兵業をしようと思う。》

「傭兵、ですか？」

「てきとうだね。」

《各地を回りながら盗賊の討伐とかをしてたら、ある程度名が売れてくるだろう。それから、行商人の護衛とかをしながら回っていいこう。》

「けど、危なくないですか？今、この国では大きな戦争が起きてるのに……。」

エヴァちゃんがそう言うのも無理はない。現在、この地は大きな動乱が起きている。それは後の歴史の教科書にも載るほどの戦争で、百年間続くことから百年戦争と言われるほどのものだ。その結果、治安は悪くなり盗賊などが多くなっているらしい。

だが、それなら困っている人たちはどこにもいるだろう。困っている人たちには悪いが、その盗賊たちの討伐をして回れば、お金は稼げるし実力も付くで一石二鳥ではないか！と単純に思ったのである。

《だからこそだ。有事に備えて、力を付けるべきだ。大丈夫だって、最初の方は盗賊の討伐だけど、戦場には行かないで護衛とかを中心にやってくつもりだから。》

「そうですか……。ならいいです。」

「な〜んか、行き当たりなばったりな計画だね。エヴァちゃんはどうするの？小さいと不自然だし、正体がバレたらことだよ？」

《それはアリイがエヴァに『幻術』をかけて、外見を変えてくればいいだろ？追々、魔法が使えるようになってくれば自分でかけてもらうようにするけど。》

それに正体はフードをかぶるとか、鎧を着けとくとかで何とかなる  
だろ。》

「うん、そうかもだね。わかったよ。」

「すみません…。早く魔法を使えるよう、がんばります。」

「いいよ、いいよ。僕は魔法の適正が、かなり偏ってるからね。  
攻撃系の魔法は初級の『サギタ・マジカ魔法の射手』と身体強化の『カントゥス・ベラークス戦いの歌』ぐ  
らいしか使えないんだよ。その代わり、補助系の魔法には自身が  
あるよ？」

自分のことで迷惑をかけていると思ったのか、申し訳なさそうに言  
ってくるエヴァちゃんだが、特に気にした雰囲気もなくアリイが答  
えた。

そう、俺たちの一番の難点はエヴァちゃんの正体なのだが、そこは  
アリイがいるから大丈夫だ。

アリイは攻撃魔法の適正がほとんどない、本人曰く変わった魔法使  
いらしい。だがそれを補って有り余るのが補助系の魔法である。そ  
のレベルの高さは折り紙付きである。魔法障壁をあげても詠唱時の  
俺の攻撃を、少しの間凌げるかもしれないほどだ。

そんなアリイのかける幻術だ。ちよつとやそつとでは解ける奴はい  
ないだろう。

ほかにも、俺の外見も問題かもしれないが、傭兵をやっていればそ  
んなにも困らないだろう。

《というわけだ。仲間なんだから持ちっ持たれつだ。》

「はいっ。」

《あと、魔法の訓練と平行して体術の訓練もしてもらおうと思う。これはアライも参加だぞ。俺一人で捌けない事態になったら困るかな。》

「そうですね。」「む、僕は頭脳労働なのに…。」

専門外のことなので、ぶーをたれているアライだが、本気で嫌がっているわけでないので了解しているのだろう。

《よし、じゃあ決まりだな。他に提案、異議は？》

「それでいいと思います。」「なしだよ。」

《さて、今日はもうここを拠点に野営しようか。》

「わかりました。（はい。）」「」

~~~~~しばらくお待ちください~~~~~

《よし、野営地も確保できたし、早速、鍛錬を始めようか。》

「「え、っ？」「」

突然だした俺の一言が一瞬わからなかったが、直ぐに理解し驚きの表情をしてこちらを向く二人。もう日が落ちてきたきて暗くなってきたし、ついさっき決めたことなので今日は無いだろうと思っていたのだろう。

そんな二人を余所目に焚き火の用意をしながら、二人に鍛錬につい

て説明する。

《こういうのは日々の積み重ねが大切だからな。まずは基礎体力の確認と底上げのための走り込みからだ。》

「……えーと、どれくらい走るの？」

《うん？今日は基礎体力の確認をするためだから、力尽きて倒れるまでだな。『ピシッ！』 うん？なんだ？……まあ、いいか。
ああ、エヴァちゃんはハンデで重し付きだ。身体強化を使うならア
リイにも追加だ。》

「けけけ、結構です！」

「ほ、本気で、ですか？」

何とか、流れに付いてきたアリイがどれくらい走るかを聞いてきたのだが、俺が当たり前のように宣^{のたま}ったことに音を立てながら石化した。さらに追加で、影の中から袋に入れられた十キロほどはあるだ
ろう石を出し、重しの提案をする。アリイはそれを何とかして免れ
ねばと必死に遠慮してくる。

重しが決定のエヴァちゃんは顔を青くしながら聞いてくるが、声だ
けでも表情が満面の笑みであることがわかるような声音とサムズア
ップで答えた。本^{マシ}気であると。

《うん、本気で。俺はここで二人の夕食の用意しとくから、その湖、一周一キロぐらいかな？をぐるっと何周も回ってきな。倒れたら回収しに行くから。》

「「……………」」

《はいはい！早く走りに行かないと、いつまでも終わらないぞ！駆けあゝし！！》

二人は絶望に落ちたかのような顔をし、呆然と立ち尽くしているが、それでは埒があかないので大声をあげる。それでも動かないようなら、と影の中から武装を取り出そうとしている俺を見て、慌てて走り出す。

「「奏お兄さん（カナデさん）の悪魔ああ！！」」

《…今の俺、本当に悪魔なんだが。》

~~~~~

ランニングの結果、アリイが早々に潰れ、エヴァちゃんがついさつき潰れたところだ。予想通りと言ったところだろうか。  
そして、二人は…

「「……ゼエー……ゼエー……」」

《寝るんなら柔軟して、飯食ってからにしろ。》

力尽きたままだった。しかし、何か食べないと成長に悪いのでご飯を食べるように促す俺だが、彼女らからしてみれば、鬼や悪魔に見えただろう。

「た、食べ、る力、すら、ないよ…。」

「そ、そうで、す…。」

《大丈夫だ。今日は食べやすいようにあっさりしてるスープだから、少しきつくても食べてから寝なさい。》

ご飯がのどを通らなくなるのを見越し、スープにしといた。こうすれば、少しは飲むことが出来るだろう。二人もそこまでしてもらい、食べないわけにはいかないので我慢して食べることにした。

「…はい。」

《はい、どうぞ。》

~~~~~

《完璧に力尽きたな。エヴァちゃんの方は結構な身体能力だけど、体の動かし方がわかってないな。

当たり前か、今までお姫様だったんだから…。問題はアリイだな、体力と筋力がなさすぎるな。二人ともこれからは基礎体力、アリイはそれプラス筋力の増加が必要だな。》

夕食を食べた後、二人は今度こそ力尽き、倒れ込むように眠った。そのままにしておいては風邪を引いてしまうので、寒くならないよう毛布を掛ける。そうしながら、今後二人をどう鍛えていくか予定を立てていくのだった。

《俺の方もいろいろと試すか…ここに、この世界に来てからどうもおかしい…。俺はこんなにも強いはずがないのに、あいつらの攻撃を何で見切れた…、いや予知できた?》

そう、俺がここまで戦えるのはおかしいのだ。確かに、幼い頃に道場へよく遊びに行っていて少しは武術が出来るので、他の学生よりもけんかに強い自身はあるがそれでもおかしい。

相手の攻撃を見切るということは相手の行動を見て予測することだ。この躰になつてから相手の動きを知覚することには問題はないが、その後の予測は経験が物を言う。だが、俺は喧嘩も少ししかやったことはないし、武術の試合もしたことはない。そんな俺が相手の行動を予測することは出来るはずがないのだ。

しかし、現実には予測どころか、デジャヴのように数瞬後の相手の行動が予知できるのだ。まるで、そうなるのをあらかじめ知っているかのように。この不思議な感覚は何だろうかと考えるが答えはいっこうに出てこない、そこで思考を止めた。

《…今考えてもしかたない。また今度、アリイに聞いてみるか。よし！そうと決まれば、それぞれの型と素振りを朝までするか。》

そして、俺は不安を取り払うように躰を動かし始めた。

《せいっ！せいっ！せいっ！》

「「うるさいっ！！」ですっ！！」

…寝ぼけながら怒られた。

~~~~~

小話

「むゝ！！奏お兄さんだけ走り込みとか筋トレしないのはずるいやい！」

《そうは言ってもな、この躰はこれで完成してるわけだから、基礎トレをしても意味がないじゃないか。》

「それじゃあ、カナデさんはどうやったら強くなれるんですか？」

《そうだな、動きの最適化と魔力操作の精密化、それに状況判断能力・把握能力の向上かな？》

「????」

《わかりやすく言えば、魔力操作がうまくなって迷いなく戦えるようになればなるほど強くなる、ってわけだ。》

「なるほど、難しそうすね。」

「えっへん！そうでしょ、そうでしょ。でも、ずるゝいゝ！なんで奏お兄さんだけゝ！」

《お前がそう造ったんだろ！？さっき威張ってたじゃんか！？》

「ふふふふふ。」

第七話 エヴァちゃんと進路会議。(後書き)

sideとかで書く試みをしました。  
おかしいところありましたら、ご連絡を。

奏君、鬼畜ですね。(笑)

奏君の属性は基本ツツコミ、時々Sです。

p.s.

PV45,000、ユニーク6,000をこえました。

皆さんありがとうございました。これからもころやんをよろしく願  
いします。^^

p.s.2

キ。グクリム。ンを発動するかも。

第八話 黒騎士（笑）。（前書き）

遅くなってすみません。

後期試験のため書くのを休んでいました。

しばらくぶりの投稿なので、書き方がおかしくなっていたりしたら  
ごめんなさい。

## 第八話 黒騎士（笑）。

さて、当初の予定通り、近くの村からの依頼で山賊の討伐にきたわけなんだが…。

《なんぞ？この惨状は？》

「痛え…痛えよ…」「た、助けてくれ…」

「ふふふふ？まだ、まだ私は満足してませんよ？」

「そうだよ？この程度だと僕たちの気が済まないじゃないか？」

《お、おい。二人ともその辺で…》

「何か？」

《…イエナンドEMONAIデス。》

未だに痛めつけようとする二人にこれ以上は酷過ぎると思ったので、二人を止めるべく声をかけたのだが、不思議な凄みを滲み出す微笑みを突きつけられた。

その威圧に負けてしまい、山賊たちを見捨て、見ていない聞いてないふりをすることにした。

そう言えば誰かが言っていた『本来、笑いというのは威嚇の一種である』と。

俺が現実逃避をしてる間にも、二人はじりじりと山賊たちのにじり寄っていた。

「た、助けてくれー！！そのあんた！？聞こえてんだろ！？助けてくれよ！？何でもするからあー！！」

「いつそのこと殺せー！！」

「ふふふ？飛びなさい？」

「そっか、打ち上げ花火にするんだね？手伝うよ。」

「ありがとう、アリイちゃん。」

「「「ヒイヒイヒイ！！？」」」」

……アー、ナモキコエナイ、キコエナイ。

一体全体、何でこうなったんだ…。こんな阿鼻叫喚の状況に…。

~~~~~少し前~~~~~

《よしっ。俺相手の組み手もやれるようになってきたから、近くの村に行って仕事がないか聞きに行こうか。》

「「押忍っ！」」

《押忍って…（汗）どうした？》

「「押忍っ！何でもないです！押忍っ！」」

《そ、そうか？（汗）》

二人がこー、二週間で何故か熱血空手部員になってしまった…。少し鍛錬がきつすぎたか？俺の中の‘普通’の基準が狂ってたのかもしれない。

運動部にも入ってなかったからわからなかったのだが、‘やはり’あの道場の鍛錬は普通じゃなかったのだろうか？

門下生のお兄さんも『有料地獄巡り』って言ってたしな、俺もあの鍛錬はかなりきつかったし。

けど短期間で強くなるのはかなり難しい。なるべく短時間で強くなれて、なおかつ実績のある手法をとったのだが…二人には少々刺激が強かったのかもしれない。

…アリのことを言えないな…うん、俺も今度から自重しよう。そっ心に決め、近くの村へと足を向けた。

《さて村に着いたわけだが、俺だと怖がられるだろうからな。交渉はアリとエヴァちゃんがやってくれ。

俺は後ろについて行って念話でアドバイスするから。あと幻術をかけるのは忘れるなよ？》

「「押忍っ！了解です！押忍っ！」」

《……そろそろ正気に戻れ。》

ここに来るまで結構な時間がたってるのだが、まだまだ元に戻らないようだ。

しかたない…おばあちゃんの知恵袋が一つ！斜め45°。チョップ！

「あいたっ！！」「きゃうっ！！」

《戻ったか？戻ってないようならもう一撃…》

「わー！わー！戻ったよ！元に戻ったよ！！だからそれだけは！！」

「そ、そうです！そうです！戻りました！！」

《ふむ、じゃあ行くか。》

「「はい。」」

ようやく元に戻った二人を連れ、村に入るとやはり怯えられた。おまけに鍬や鎌で思いつきり警戒された。

…予想してたとはいえ、あからさまに怯えられるとやっぱり凹むものだ。

化け物のように扱われたが、何とか誤解を解き村長さんと話をする
と（正確にはアリイが）、戦争のせいで治安が悪くなり近くの山道で山賊が出るようになったらしい。そのせいで行商人たちも村に来れず、村から出るのも難しくなったので困っていたらしい。

そこで「山賊退治のために俺たちを雇わないか？」と提案したのだが、その仕事に対する謝礼が出せないと言ってきた。

それもそうだ。小さな山村に傭兵を雇うなんて大きな金は出せるはずがない。

しかし、今回は二人の仕上がりを見るのが目的だったので、一晩の飯と宿を用意してくれればいいと言ったところ、喜んで雇ってくれた。

早速、山賊たちを退治するべく山道に入ったところ、驚くほど短時間で山賊たちと遭遇することになった。

《ふむ、どうやら早速獲物が釣れたみたいだな。》

「早いですね。」

「こっちは手間が省けるから良いんだけどね。」

いかにもと言わんばかりの山賊チックな格好をした男たちに周りを囲まれた。手には短剣やショートソード、弓矢などいろいろな装備をしている。

向こうからすれば獲物がかったと言いたいのだろうが、それはこっちだと言ってやりたい。

「へっへっへっへ。テメエら、荷物と有り金を全部置いていきな。」

なんだろう？この山賊A（仮）の台詞にデジャブを感じるのだが？やはりこういう人種にもテンプレートやマニュアルというのが存在するのだろうか…、そんなことを考えながら、二人に指示を出すことにした。

《よしっ。今までの体術の試験をするか。いいか二人とも？俺は手を出さないから、体術と身体強化だけでこいつらをのしてこい。》

「「はいつ。」」

「へっ！そんな坊主どもに何が出来るってんだ！やっちm…「ほい。」へぶう！！」

「アニk「はっ！」ぐぼおっ！！」

俺の言葉を聞いて嘲笑していた山賊A（仮）だが、台詞を言い切る前に一撃で仕留められた。

まさか少年程度の身長のアリィたちが、仲間を一撃で倒すような猛者とは思わなかったのだろう。沈められた仲間を見て動揺した山賊

たちが、次々に倒されていく。

十分もすると二人に沈められた山賊たちの山が出来ていた。

「奏お兄さん、殲滅できたよ。」

「カナデさん、こつちも終わりました。」

《おー、おー。早い早い。ゴロツキ程度なら瞬殺に出来るレベルになってきたな。》

「そりゃあ…アレと比べれば…ねえ？」

「うん…何度死ぬかと思ったことか…死ねませんけど。」

十人ほどの山賊を瞬殺して余裕綽々ゆゆうせつせつのに二人に労いの言葉をかけると、鍛錬を思い出したのか顔に影ができ、「ずーん」という効果音とともに沈んでいた。そんな二人に苦笑いをするしかない俺だった。

「クソッ、何だっつてんだ…！俺たちの苦勞もしらねえ、貧弱そんなボンボンどものくせに！」

仕事が終わったので、男たちを拘束して村に帰ろうとしたのだが、どうやら最初に倒されたのが喋れるまでに復活したようだ。

《うるさいん…誰が苦勞も知らないって？」…はい？》

周りの奴らもうめき声を上げているので、これ以上もたもたしているとうるさくなると思い、面倒くさがりながら縄に付けようとしたところで、冷たく重いプレッシャーを感じた。

振り返ってみると、二人がうつむいて何かを呟いていた。

「ならわかるんですか…自分の三倍近くある鉄の巨人と組み手する
ときの怖さが。『ほらほら、避けるよ』。ってさわやかに言いな
がら一撃受ければミンチになりそうな攻撃を紙一重で避ける時の恐
怖が…ブツブツ…。」

「そつだよ、中腰の姿勢で重りを持たされて何時間も固定される辛
さが…『指がとれる〜！』って言うത്『そう言っでとれた人は一人
もないから大丈夫、大丈夫。』て言われて、何もなかったみたい
にひたすら続くんだよ…ブツブツ…。」

《あ、あの〜、お二人さん？》

「それなのに…」

「今…」

「何て言っただの？（言っただんですか？）」「」

「」「」「《ヒイヒイヒイ！！》」「」「」

…やう あい。

Q：何がヤバイのか？

A：二人の目からハイライトが消えて無表情になってる。 〓 非常に
怖い。

そう言うのと二人の背後からにドス黒いオーラが吹き出した。
俺に向けられてるわけではないのに（そうであってほしい…）思わず悲鳴を上げてたじろいでしまう。

「ねえ、エヴァちゃん。この人たちには調き…じゃなくて教育が必要に思えない？」

「ええ、そうねアリイちゃん。二度と巫山戯たことが言えないように、きっちりわからせなきゃね？」

そう言うのと、顔に怖い笑顔を貼り付けて山賊たちに歩を進め始める。山賊たちも逃げようとはするのだが、さっきやられたダメージ＋積み上げられている重さで動こうにも動けず、ただただ悲鳴を上げながら処刑を待つだけになっている。

そして、ここから地獄が始まった…。

~~~~~

そして今、山賊たちは一人残らず星となった…ムチャシヤガッテ…  
というのは冗談で、二人が下から上と殴り抜いて地平線が見えそうな高度まで上げ、落ちてきたのを俺が捕獲するという作業をひたすら続けていた。地面に真つ赤な花が咲かなくてよかった…。

みんな落ちてくる頃には走馬燈の鑑賞を終えているので、縄に付けるのは簡単だった。

「ふっ、すっきりしたよ。」

「そうですね。実に清々しい気分です。」

《そ、そうか。ならいいんだが…》

鍛錬のやり方を考え直しとこ…次からはもう少し優しいやり方でいこう…

この後、山賊たちを捕縛して帰って来たものの、村人たちから怯えられた。

それ以降もアリイとエヴァちゃんは自分たちに嘗めたことを言った相手を同じような状態にしてしまうようになった。しかも、その惨状を見た人たちは俺がやったと勘違いし、『殲滅の黒騎士』やら『黒い魔神』と言ったあだ名で呼ばれるようになってしまった。俺じゃないのに……

~~~~~

小話

《よし、柔術の組み手するぞ。》

「「はいつ。」」

《実力の近い者同士での組み手つてことで二人でやってくれ。》

「「ほつ。」」

《（本当は俺が「ほつ。」何だけどな…）》

~~~~~

## 小話2

とある町での兵士たち。

「おい、聞いたか？あの話。」

「ああ、『殲滅の黒騎士』のことだろ？」

「なんだそのご大層な名前は？」

「お前、知らねえのかよ！最近出てきた奴で、小さな村をやら町やらで盗賊やら山賊やらを潰し回ってる傭兵の名前だ。」

「はっ、景気のいい話だ。そいつはさぞかし儲けてんだろうな。」

「それがな？そいつは仕事をしてもほとんど金をもらってねえんだと、もらっても少して後は従者の飯と寝床を要求するだけだってよ。」

「はあっ？何がしたいんだそいつ…」

「俺が知るかよ。それで、そいつは相手のほとんどを恐慌状態に叩き落としてるらしくてな…」

「そいつと戦った奴は、もうその道で生きていけないくらいに怯えてるらしいぜ。」

「そいつは…野党とかに恨みでもあんのか？」

「さあな、そう言えばそいつの名前は有名だけど、どんな格好してんだろうな？お前知ってるか？」

「ああ、何でもそいつは熊より大きい身の丈でいつも黒い鎧を着込

んで、従者を二人連れてるらしいぞ。だからそこから『黒騎士』  
って呼ばれてるってよ。」

「なんだそのバケモンみてえな格好の奴は。絶対どこかで尾ひれ背  
びれ付いてるぜ。はははははは！」

「違いえねえ！わはははははは！」

「……いた。」

「は？何が？」

「『殲滅の黒騎士』……」

「「なにいつ！！？」」

「うおっ！マジでかいぞ！あんなに襲われりゃ再起不能になる  
わな……。」

「ああ…俺だったら、あいつと会ったら直ぐに逃げるな……。」

「関わり合いにならないのが正解だな。」

「「ああ。」」

《ひでえ…俺じゃないのに…》

「カナデさん？」

「どうしたの、奏お兄さん？ブツブツ呟きだして？」

《何でもない…》

「「？」」

第八話 黒騎士（笑）。（後書き）

黒騎士の名前はこうしてついたのである。の巻でした。

第九話 俺たちの流儀・上。(前書き)

今回は上・下編です。それではどうぞ。

## 第九話 俺たちの流儀・上。

俺の二つ名が売れてきたある日、アリイがとある話を持ってきた。

《古城の調査？》

「うん。この町の町長さんの話だね？なんでも、町外れにある古城が最近おかしいんだって。」

《おかしいって？》

俺が聞き返すと、今度はエヴァちゃんが話の続けはじめた。

「はい。何でも、誰もいないはずの城から夜な夜な獰猛な獣の遠吠えや、唸り声が聞こえてくるらしいです。」

「不気味に思ってた町の若い人たちがその城に行ったんだけど、全員帰ってこないんだって。流石にまずいと思って、近くの町まで出向いて何人が傭兵さんを雇ってもう一度古城を調べに行ってもらったんだけど……」

《そいつらも全員帰ってこない…か、魔法使いの仕業と思うか？》

俺がそう思った理由は二つだ。一つ目は誰もいないはずの城から獣の唸り声が聞こえると言うこと、このあたりには比較的大きな町が近くにあるため、獣たちが好んで近づくことはないはずだ。

これだけの理由なら、たまたま獣たちが住み着いたという線も無いことはない。

だが、二つ目の理由調べに行った人たちが帰ってこないということ

だ。町人だけならともかく、傭兵までもが誰も帰ってこないのはおかしい。少なくとも獣の仕業ではない。野党たちの根城になってるなら、獣の唸り声はするのは変だ。

どうやらアライも同じ考えにたどり着いていたらしく、俺の言葉に頷き話を進めた。

「多分。鳴き声が聞こえるってことは、合成獣キメラの実験・研究とかそれに類することをしてるんだと思うよ。」

「……………」

そんな中、エヴァちゃんは静かに俯いている。魔法使いと実験と言う言葉を聞いて、自分が吸血鬼にされたときのことを思い出してしまっているのかもしれない。日常から一転し、非日常を歩まざるを得なくされたのは、ほんの数年前のことだ。未だにトラウマになっていても仕方ないことだ。

《そうか…その依頼は受けたのか?》

「ううん、まだ。奏お兄さんと話してから決めるって言った。どうするの?」

《受けようか。今は特に急いでないし、ここで見捨てるのも気分が悪い、それにもしその通りだったら対魔法使いの経験に良いかもしれない。二人とも良いかな?》

そう、俺たちがこの旅をしだしてもう一年ほどになるのだが、魔法使いたちとの戦いは一回もなかった。まあ、大概が野党たちとの戦いだったので裏の意味での一般人や極稀に気を使う相手がいるくらいだった。

「僕は良いよ。」

「……私事です。」

少し迷っていたが、エヴァちゃんも了解してくれた。

《それじゃあ、町長に話を付けたら直ぐに行こうか。》

~~~~~

《………怖くないもん……》

「奏お兄さんまださっきのこと気にしてんの？いつものことじゃない。元気だしなよ。」

「そ、そうですよ。カナデさんのことは私たちがよく知ってますから、それでいいじゃないですか。」

町から件くだんの古城へと続く道の途中、肩を大きく落とした黒い鎧姿をした大柄の男が、横について歩いている小さな女の子二人に慰められているというなんともシュールな光景が広げられていた。

俺たちがこの話を受けるべく、町長の元へと向かっていくと行く先々の人たちに「ひいっ！せ、『殲滅の黒騎士』！！」と怖がられたのだ。

いつも怖がられているが、そんなに怖いもんか？ただ単に背の低い家より少し小さいぐらいの高さで、黒の鎧姿をしてるだけじゃないか。怖くないだろう！……リアルにいたら十分怖いな……。

だといつても、初対面の人にそれは失礼ではないかと思うのだ…もう少し、こう、柔らかい対応をだな…ブツブツ…

「奏お兄さん。もう城の前まで来ちゃったよ。そろそろ元に戻らないと、いろんなことしちゃうよ？」

その言葉に背筋のあたりを悪寒が走ったこともあり、何とか正気に戻ることが来た。そうして前に目をやると湖の畔に造らている歴史を感じる広い城の正門があった。

しかし、アリの奴、色々って一体何をする気だったんだ…。

《……すまん。もう大丈夫だ。いつも通りだ。》

「カナデさん、大丈夫ですか？」

エヴァちゃんが心配そうに声をかけてくれる。良い子だ本当に良い子だ。この子のためにも頑張らねば！と、多少気合いを入れ直した。

《応よ！これからはいつも通りのカナデさんだからよろしくっ！》

「大丈夫じゃないでしょ。テンションがおかしいもん。…ちえっ。」

「ですね。」

…心情をしっかりと把握されていて少し恥ずかしい。しかし、アリの奴は何で不機嫌なんだ？わからん。

《と、ところで扉は開きそうか？》

「いやいや。これっぽっちも動かないね。」

「はい。私とアリイちゃんが身体強化して開けようとしたんですけど、無理でした。」

《そっか…》

今の二人の身体強化はそこら辺にある岩程度なら楽に碎けるほどだ。そんな二人の力で開かないとなるとちょっとやそつとでは開かないだろう。

「壊す？それとも入れるところがあるか、周りを見て回る？」

《いや、静かに正門から入ることにしよう。》

「え？どうやるんですか？全然動きませんよ？」

力ずくでも動かないとなつて壊そうとするアリイを遮っていった言葉にエヴァちゃんが頭に疑問符を浮かべながら聞いてくる。それもそうだ、動かないから困っているのにそれを軽々と通ろつと言つただから。

《大丈夫。扉を開けなくても入れるから。》

「???」

「アレ使うの？というか扱いきれるのかな？」

俺がそう言つと、エヴァちゃんはますますわからなくなり、眉をかめ首をかしげながらこつちを見てきた。そんなエヴァちゃんとは対照的にアリイは何をするかをわかつたらしく、俺に対して挑戦的

な目を投げかけてくる。

《ふっふっふっふ。アライ君、俺も日々研鑽を積んでるとい
訳なのだよ。コレが。》

「アライちゃんは何をするかわかるんですか？」

「まあね。奏お兄さんは僕が造ったんだからね！僕ほど奏お兄さ
ん（の躰に）に詳しい人は他にいるはずがないよ！けど、何をす
るかは秘密。」

「ええ。」

自分一人だけがわかっていなく、俺とアライとの掛け合いを見て一
人だけ仲間はずれにされてるように思ったのだろう。エヴァちゃん
は頬を膨らませて不平をもらしていた。精一杯不満だとアピールし
ているんだろうけど、エヴァちゃんみたいな子がそんなことをして
も可愛いだけである。

しかし、アライよ…いくら事実でもその言い方は…

《なんか、ハズイ言い方だな……まあいい。今からするから、見て
ればわかるさ。二人とも少し離れてて。》

「はい。（わかりました。）」「」

改めて、気合いを入れ直し集中する。手に影を纏い、この局面で必
要な武装を換装する。

《それじゃあ、やるか。スィショウ
「翠晶」ショウダウン！》

影が晴れたとき、両手に翠色の爪が付いた籠手ガントレット現れた。それは、見た者に清浄な流水をイメージさせる透き通った色だった。

《続けていくぞ！》

そして、その能力を解放する。

《——闇より刮きぎし氷晶ひょうしょうより出でし》

水を操るアスラマキナ、その力は全てを融かす清浄な流れ！

《——其は、科学の涙が融かす翳かげ！！》

能力を解放したことにより籠手の中から魔力が溢れ、扉全体に薄く万遍なく広がり浸透していく。すると、それまで硬質で強い威圧感を与えていた扉から柔らかい感触が伝わってきた。どうやら上手く思っていたとおり、事を為すことが出来たようだ。

《よし、こんなもんか。二人とももう来ても良いぞ。》

「それは？アリイちゃんの造ったという武装の一つですか？」

予定通りに成功させることが出来たので、離れていた二人を呼び寄せると、俺の腕に現れた「翠晶」に興味津々なエヴァちゃんが小走りで寄ってきて尋ねてくる。すると、自分がやったことのように胸を張りながらこちらに来たアリイが俺の代わりに説明しだした。

「そうだよ。名称は「翠晶」、形態はクロー付きガントレットだけど、「亜鉛華」よりも近接戦での攻撃力を重視しててクローを使った格闘戦ができるんだよ。保有能力は物質の分子結合を解いて

液状に分解することが出来る『物質液化』だよ。」

「?????」

アリの説明を受けても意味がわからなかったようで、さつきよりも多くの疑問符を頭の上に浮かべ、大きく首を傾げた。それもそうだろう、この時代のエヴァちゃんに分子結合やらなにやら言ってもわかるわけがない。もう少しで倒れそうになるまで首を傾げているエヴァちゃんに苦笑しながら端折った説明をする。

《はは、分子結合とか言われてもわからんよな？簡単に言うと、何でもかんでも水に変えることが出来るってことで、今この扉は水と扉の中間の物質になってるってことさ。》

「はえっ！？そんなことが出来るんですか!？」

「実際出来てるからね。けど、うまいことよくできたね？この状態にするのって結構繊細な魔力操作が必要だと思っただけど？」

俺の説明を聞き、あまりに予想外のことに驚きの声を上げた。そんなエヴァちゃんを余所目にアリイは俺が今回のような緻密な魔力操作ができたことに純粹に感心している。そう、実はこの魔力操作は意外に難しいのだ。ただ水に変えるだけなら力任せに魔力を込めるだけで良いのだが、水と物質の中間のジェル状にするには薄く均等に細やかに魔力を広げなくてはいけない。それは以前までの俺には出来なかったことだが…

《だから言つたろ？俺も日々研鑽を積んでるって。それよりも、早いとこ通った通った。この状態での固定は結構疲れんだから。》

「わ、わかりました。」

「了解しました。」

この状態での固定は中腰のまま空気椅子をしてるようなもので、なかなか疲れるのだ。

中に入ることを促し、全員が通りきった後に扉に込めている魔力を遮断して元の状態に戻した。

入った城の中には誰もおらず、また獣たちもいなかった。どうやら俺たちが予測していた通り、魔法使いの根城である可能性が高くなってきた。

《さて、入ったのは良いがこれからどうするか。》

「か、考えてなかったんですか!？」

「エヴァちゃん、甘い甘い。奏お兄さんが用意周到な作戦を考えてるはずが無いじゃないか。行き当たりばったりが奏お兄さんだよ。」

《るっせい!細かいことは良いんだよ!いっぺん「知覚領域」を広げてみるから少し待ってろ。》

「ふふん、言い返せないんだね。」

「もしかして、カナデさんってかなりの面倒くさがり屋さんですか?」

「そつだよ。基本、面倒くさがりの適当主義だよ。」

まさかのノープラン宣言に驚いているエヴァちゃんだが、いつものこととわかっていて冷静なアライがナチュラルに毒をはいてきた。そんなアライに対して吠えながら状況を把握するために「知覚領域」を索敵モードにまで広げる。

周りを探索するべく精神を集中するために静かにすると、言い合いに勝ったと思ったアライが追い打ちをかけてくる。エヴァちゃんもそれに乗りかかり、言いにくいことをズバツと言ってくる。

…お前らの中の俺の評価ってどんなもんよ？

《うるさいよ！静かにしてろー！！》

「はい。」

《たくっ…ん、出来たけど、これは…。》

「どうしたんですか？」

《いや、広げてほしいの把握は出来ただけだな、中身を見れない部屋が所々あるんだよ。》

そう、周りの地形や間取図を把握することは出来たのだが、いつもと違い感覚の所々に薄くぼんやりとしか見えないところや、^{もや}靄がかかっているように見えるところが出来ているのだ。

今までに無かったことに戸惑っている俺に顎の下に手を置いて考え込んでいたアライが声を上げた。

「それは多分、結界を張ってる部屋だね。」

《「結界？」》

「そう。お兄さんの「知覚領域」は、例外的に一部の結界の内部は見えにくいんだよ。

結界つてのは元々、外の世界から内の世界を切り取るって意味があるから、内部と外部は違う世界って認識して中は見えないんだ。けど、まだ発動してない結界とか、鳴子みたいな能力の結界なら内部はみれるよ。それか、逆に繋げる意味があつたならその先まで見えるかもね?」

《ほー。初耳なんだが?》

本当に初耳だ。アリイとはそこそな付き合いになるが、今までそんな説明を受けたことがない。そう思い、アリイに対して非難の声を上げるが、悪びれもなくしれつと答える。

「言つて無かつたからね。」

《言えよ!? たくつ、他に見えないとことかはあるか?》

「うーん、特にないけど、強いて言えば生き物のお腹の中とか?」

《はあ、わかった。》

「あの、どういう風に見えてるんですか?」

アリイの話によると結界の他には生物の体内もみれないらしい。これはよかった、生物の中身など例え見れたとしてもグロテスクすぎて見る気にならない。と言うか見たくない。

しかし、これでこの屋敷に魔法使いがいることは確定したようだ。そう思っているとエヴァちゃんが横道に逸れていた話を本筋へと戻すべく、話しかけてきた。

《そうだな、境界は部屋ごとに薄く細かくあるんだが、一番大きい
つてか塗りつぶされてるみたいに見えないのは城の頂点と、地下だ
な。地下の方はかなり大きな空間になってそうだ。》

「多分、上に居室で地下に実験場か、ベタだね。」

「……………」

俺の「知覚領域」に穴がある中、一際見ることが出来なかったのが
そこだった。他と違い、まるで白の絵の具をぶちまけたかのように
塗りつぶされている場所があったのだ。おそらくそこがこの城の中
での要になる場所なのだろう。また、人が住んでいるならば居住性
の関係から上に人がいて、下で作業をするのだろう。

俺たちがそんな話をしていると、エヴァちゃんが黙り込んでしまっ
た。今までは俺たちと話をしながら恐怖を紛らわせていたが、や
はり押さえきれぬものではないのだろう…。

《エヴァちゃん大丈夫か？きついなら村に戻っても良いんだぞ？》

「カナデさん…大丈夫です。いけます！」

《そうか…きつくなったら俺やアリイに声をかけてくれよ？》

「そうだよ。僕たちは友達で仲間なんだからね！」

「アリイちゃん…うん！」

怯えているエヴァちゃんに俺たちがそれぞれ声をかけた。
そつ、俺たちは仲間だ。一人に何かがあれば残りの二人が助ける。

それが出来るのが仲間というものだ。

俺たちの呼びかけのおかげかエヴァちゃんはいつもの元気を取り戻すことが出来たようだ。

《それじゃ、行くか。まずは下に行こう。今までに行方不明の人たちがいるかもしれない。部屋の真上になる場所まで移動してから「翠晶」を使って一気に潜ろう。危険かもしれないが真正面からだとなれなりの防犯対策をしてるだろうからそっちの方がいいだろ。》

「はい。（了解。）」

《じゃ、いくぞー！》

俺たちは地下施設へ侵入するべく移動を開始した。

第九話 俺たちの流儀・上。（後書き）

後半へ続くー。（ちびまる子ちゃん風に）

と言うわけで、第九話でした。

気付くとアリの年齢がもう17、8になっている罫。

い、一体いつの間に！誰の仕業なんだ！？（↑自分だよ）
と思わず一人コントをしていました。（笑）

用語・補足説明

「知覚領域」

空間を内部と外部とで区切るタイプの結界の中は見ることは出来ない。

また結界でなくても上記に類するタイプの物の内部を見ることは出来ない。

（例：ダイオラマ魔法球、無間方処の咒法、エンコンバンデンティア・インフィニータ無限抱擁など）

上記以外の人払いや防音、鳴子タイプの結界だと靄がかかっているように見えたりぼやけて見えたりする。

第十話 俺たちの流儀・下。 (前書き)

前回の続きです。どうぞ。

第十話 俺たちの流儀・下。

《どうしてこうなった。》

「あわあわ。」

「何も見ずに一気に潜ったからだと思うよ？」

あれから予定通りに地下施設の真上に位置する場所まで移動し、「翠晶」を使って潜ったのだが、地面を抜けてたどり着いたのは檻の中だった。「翠晶」を影へ片付けた後、俺とアリイはいつも通りの掛け合いをしているのだが、エヴァちゃん一人があたふたと慌てている。

《そうか、前方不注意って奴だな！いや、この場合は下方不注意か？》

「そうかもね。」

《「あははははははははは。」》

「二人とも笑ってる場合ですか！？何でこの状況下でそんな飄々としてられるんですか！」

「くくくぐるるるるる。」

エヴァちゃんが慌てていたのは檻の中にいたこの先客が原因だった。おそらく実験用に連れてこられた熊が6頭ほどいたのだ。そして、無理矢理捕獲されて連れてこられたせいも、普段山にいる個体より

も気が立っているようだ。そんな中、自分たちを連れてきた奴と同じ種族の奴らが現れればどうなるかは火を見るより明かということだ。

「ほら！ 囲まれちゃったじゃないですか！」

《そうだな。まあたぶん大丈夫だろ。わはははははは。》

「何でそんな根拠のないことが言えるんですか！？ 今にも襲われそうなのに何でそんなにのほほんとしてるんですかー！？ アリイちゃんも何とかいつてよー！！」

「うん？ 奏お兄さんが大丈夫って言うならきつと大丈夫なんだよ。あははははははは。」

「むきー！ー！ー！！」

そんな危険な状況の中、脳天気話している俺とアリイにエヴァちゃんやんが痺れを切らして詰め寄ってくる。だが俺たちはそんなのどこ吹く風と言わんばかりに笑っている。

《大丈夫だってエヴァちゃん。襲ってくるなら返り討ちにすればいいんだからさ。》

「そんな簡単にできますか！」

《できるって、もう少し自分の実力に自信を持ちなよ？》

「でも…「ぐるああああー！！」来たあー！？」

俺がさらつと言うとエヴァちゃんがすごい形相で言い返してきた。だが、実際のところ今までの鍛錬の量と密度、そしてその内容を考えると熊ぐらいは簡単に倒せるはずなのだ。それをできないと思うのはまだまだ一般人の常識にとらわれているからだろう。

人というのは想像することは実現可能だが、逆に想像できないことは実現できないものだ。

そろそろそのリミッターを外してもらおうと、直ぐ檻から逃げ出さずにおちよくって熊を誘き寄せている訳だ。

そうして俺たちがコントをしていると熊の方も痺れが切れたようで、俺の目的通りに雄叫びを上げながら俺たちに向かってきた。

《ふっ、命知らずなやつらだ…》

「そこ！格好つけてないで応戦してください。」

予定通りに事が運び、悦に入っているとエヴァちゃんに怒られた。

~~~~~

「た、倒せた…。」

《な？簡単だったろ？》

「こっちもしとめたよ。」

襲いかかってきた熊たちは数分のうちに迅速に対処された。

わかりやすく、かつ簡潔に言えば、

『ガシッ！ボカッ！熊たちは死んだ。スイーツ（笑）』

というわけだ。（わかりやすくありません。）

《向こうのほうに部屋があるみたいだからそっちに行くか。》

そう言う俺は簡単に檻を曲げ折り、次の部屋へと向かった。その時に後ろから『できるなら最初からそうしろよ!』という意志を込められた視線をひしひしと感じたが藪蛇もイヤなので知らんぷりをしておこう。

そして、次の部屋に来たのだが、そこにはまともな人なら嫌悪感を感じずにはいられない様相が広げられていた。

部屋の所々に解剖するための道具が揃えられ、それを用いて解剖された動物の内臓や四肢が散乱していた。中には人と思われる物まであった。

俺はこの躰のおかげで吐けずいられるがアリイとエヴァちゃんの二人はよく我慢できているものだ。もし俺がこの躰じゃなくて生身の体だったら吐いていると思う。

《ひでえ、なんだこりゃ…。いわゆる腑分場ってやつか？趣味悪いな…。》

「うえええ、グロイね…気持ちわるっ。」

「ど、同感です…。」

「おやおや、最近の客は礼儀も知らないようだ。人の家に無断に入ってきたあげく、人の研究内容を勝手に盗み見るなど無礼ではないですか？おまけにそちらの二人は本当の姿まで隠してらっしゃる。」

俺たちが部屋の感想を述べていると突然声をかけられ、驚いて声の方向へと視線を向けた。部屋に3つある扉の一つに、長いフード付

きのローブを着て長い杖を片手に持っている男がいた。もしかなくともこの趣味の悪い部屋の主だろう。

俺たちは瞬時に警戒のレベルを引き上げ、それぞれに身構える。この男は直ぐにアリイとエヴァちゃんに幻術がかけられていることに気付いた。ということはそれなりの実力だということだろう。

「とりあえず姿を見せてもらいましょうか。」

「えっ！？げ、幻術が！？」

「ぼ、僕じゃないよ！？」

《…悪いな。田舎育ちなもんでそんなこと意識したことないんだよ。》

どういう方法を使ったかは知らないが、男がそう言う二人にかけられていた幻術が突如として解除された。二人はそのことに驚いているが、ここはあいつの巣だ。何かしらの罠がかけられていてもおかしくない、と二人のことを無視して男の挙動を監視している。

「まあいいですよ。あなた方の前にもそういう人たちが沢山来られましたからね。さすがにここまでたどり着いた人たちはいませんでしたが…。いったいどうやって来たんですか？」

《秘密だ。そっちの方がおもしろいからな。ところで今までに来た奴らはどこだ。》

「秘密です。と言いたいところですが、ここまでたどり着いたご褒美に教えてあげましょう。どこにいるかをね…」

男がそう言った瞬間、全身を悪寒が走った。この感覚は何度も体験したことがある物だ。

そう、あの山羊頭の悪魔との戦いの時、山賊の頭領・ジードと戦いの時、あのとき感じた感覚が蘇る。

こちらに脅威が向かってきている！守れ！守るんだ！本能が警笛を鳴らす。それこそ「知覚領域」が認識するよりも早く、予知することく。俺がとるべき行動は二人をこの脅威から守ること！

《アリイ！エヴァちゃん！》

「ガアアアアア！！」

俺はとつさに二人を引き寄せ抱えこんだ。

瞬間それまで二人がいた場所を挟り、咆吼をあげながら黒い影が通り過ぎた。どうやら男が入ってきた扉と別の方から入ってきたようだ。

本当にとつさの行動だったので二人は顔を俺の鎧に思い切りぶつけてしまい、非難めいた視線を投げかけるがそれまで自分がいた場所を見ると顔を青くし、改めて男の方へ構えなおした。

「ほう、気づきましたか。すごいですね。今までの人たちは反応できずに死んでましたよ。」

男は驚きながら称賛を投げかける。そんな男の隣には先ほど襲いかかってきた影がいた。

その姿は頭は獅子、胴体は山羊、尻尾は蛇の姿をしていた。さながらギリシャ神話に出てくるキマイラのようだ。おそらく、それを参考にして作り出したのだろう。

その威圧感は野生動物と比べものにならないほどに強く、濃密な物だ。

そうしていると、男がニヤニヤと口に三日月を浮かべながら先ほどの問いに答えてくる。

「さて、今まで来た人の居場所でしたね。それはもちろんこのキマイラのお腹の中ですよ。」

《「ッ！」「」》

「何人が生き延びた人もいたんですけどねえ、その人たちも実験に“使った”ら直ぐに“壊れて”しまいましたよ。調達しなくちゃいけないのが面倒くさくて仕方ありませんよ。」

「酷い…なんでそんな酷いことを！」

「酷い？なにが？愚鈍な彼らが私の崇高な研究のための礎となれたのです。むしろ感謝してほしいですね。それに、私と同じあなた方が私にどうこう言えるとは思えませんがねえ。」

《…それは、どういう意味だ。》

男の発言にエヴァちゃんが声を漏らす。

その発言に本当に不思議そうに答え、そして至極当然のようにそれが常識のように話す。

そして、自分と俺たちが同じ穴のムジナだと下卑<sup>げひ</sup>た笑みを出しながら、一人一人をなめ回すように見回してくる。

「んふふふ。私にはわかりますよ。まず、そこにいるのは真祖の吸血鬼！何年か前にマクダウェル家が実験をし、逃げられた個体ですよねえ。術者本人が死んだのでその術式は途絶えたのですが、ここにその成功例がいる。とても食指が動かされますが、そこに行く

つくまでに一体どれほどの人が使われたのでしょうかねえ？」

「……」

男は嬉々として語る。

「その鎧姿のあなた、あなたは人間じゃないですよねえ。とても人間に近い波動を出しているがその根幹にいるのは人にあらずるモノ！そんなのが人に御せるとはとうてい思わないし、思えない！しかし、実際にはその鎧はあなたを覆い御している！人間の作りしモノが！人あらずるモノを御している！！ああ、そうと考えるだけで興奮が止まらない！早く調べたい！解剖したい！！己が技術にしたい！！！」

男は自分の発言に自分で興奮し周囲に狂気と障気を振りまく。

そして、ひとしきり叫んだ後、クールダウンしアリイに目を向ける。

「そして、それを造ったのは、あなたですよねえ？」

「例えそうだったとしても、僕とあなたは違う！僕はこんなことをしない！」

同類と見られたことに強い嫌悪感を持ったアリイが叫びながら否定する。

だが、男はアリイに執拗に詰め寄る。

「いいや！同じですよ。その彼が呼び出されるのに何人、いや！何十人使いましたか！そして、彼に施されている術式を見つけるのに幾年の月日が、幾人の血が流されたのですか！

すべてはその結果の上に成っている！私がしていることとあなたが

したこと！何が違いますか！！」

…今までは静かにしていたが、ふつふつと怒りがわいてきた。

「僕は、僕は…《もういい。》奏お兄さん？」

「なにがいいんだ《貴様はもう喋るな。》ヒッ！？」

我慢していたが、もう限界だ。

《人が黙って聞いてりゃ、ぐだぐだぐだぐだと意味のわかんねえことばかり喚きやがってよ…。テメエと俺たちが同じ？一緒にすんじゃないよ。一人は吸血鬼、一人は機械仕掛けの悪魔、一人はそれを造った科学者。確かに俺たちは、この時代の奴から見れば王道や正道から外れた外道だろうよ。だがな！》

俺たちはこの世界の異端だ。それは否定するつもりはない。なぜならそれは変えようのない事実なのだから。だが！

《俺たちは自分が自分である矜持つてのがあるんだよ！例えそれが他のやつから見れば悪だの罪だの言われることだろうが！俺たちは誇りを持って生きてんだよ！！

ただ自分の欲を満たすために人に！動物を！命を弄んでる下衆のテメエとは違うんだよ！！！

俺の妹分たちを汚すんじゃないよ！！！！》

だからこそ！こんな奴と一緒にされたくない！

「…ふ、ふふふふ！だからどうした！？矜持だ？誇りだ？そんな物が何の足しになる！！私はすべてを知りたい！この世界の何もかも

を！その何が悪い！！利用できる物を利用して何が悪い！！」

《喋んなつってんだろぅが！三下があ！！》

「キマイラ！！そいつらを動かなくなるまで痛めつけろ！！」

「グルアアアアア！！」

俺が怒りのまま男へ襲いかかろうとすると、キマイラが間に入り込み邪魔をする。

そのままぶつかり、キマイラとがっぷり四つに組み合う。さすがに魔法で作られた合成獣なだけあり、その膂力たるや、先ほどの熊など相手にならないほどで身体強化を使っていはいえ、俺と拮抗するほどだ。

そうしていると、キマイラの周囲に火の玉や光の玉が次々と浮かび上がり俺へ猛然と襲いかかる。

それを後ろに跳び、避けるがそれぞれの口から火を吐き追撃をかけてくる。

《チィッ！うざってえな、このツギハギ猫がああ！！》

「ええ！？なんで！？」

「うそっ！？私たちは魔法が使えないのに、何で魔法が使えるの！？」

いっこうに退こうとしないキマイラに苛つきの声を隠せずにいると、後ろから二人の驚きの声上がる。

どうやら、二人は先ほどから魔法が使えないかこっそりと試していたようだ。

自分たちが使えずにいるのに向こうが一方的に使えることに驚きを隠せずにいると、男が嫌らしい笑みを蓄えたまま得意げに説明し出す。

「この部屋には精霊への干渉を限定する魔法封じの呪いをかけている！この空間では指定された者以外が魔法使うことはできない！そして、そのキマイラをただの合成獣だと思うなよ！そいつはあらゆる獣を合成した後に全身に呪紋を刻みこんで魔法を使えるようにした特別製だ！！倒せる物なら倒してみろ！！」

「ガアアアアア！！」

《……………》

「魔法が使えないのにこんなのが相手なんて…」

「やばいね。どうする奏お兄さん。……奏お兄さん？」

魔法が使えないという条件では、アライが相手をすることはできない。エヴァちゃんが相手にするには荷が重い。実質、魔法抜きで俺だけで相手をしなければならぬと言ふ厳しい条件と思い、アライが俺に声をかける。だが、先ほどまで怒り狂っていた俺が静かにしているのを不思議に思う。

俺は、キマイラに対して憐憫の情を抱かずにはいらなかった。こいつらはここへ連れてこられて切り刻まれたあげく、他の生き物と継ぎ接ぎにされ、命を削るような処置を施されたのだ。そして、自分の体をそうした張本人の言いなりにされている。

もはや、怒りを通り過ぎて哀れに思えてきた。

《…哀れだな、せめて痛みがないように眠らせてやるよ。出る、」

翡翠」。》

影からロボットのような淡緑色の籠手が現れた。

《——闇より静けき氷海に眠る》

その籠手から響く音色は、

《——其は、科学の音色に凍てつく影！！》

この世の全てを凍らせる音色！

「グルアアアアア！！」

俺から巻き起こる魔力に本能が反応したのか、数十の魔法の弾とともに俺に向かって突撃してくるキマイラだが、準備はもうすでに完了した。

《さあ、眠れ。「凍てつく音色」。》

俺の意志に応じ「翡翠」から透き通った音色が部屋に響き渡る。その一瞬で突撃してきていたキマイラの体が完全に凍り付き、少しの振動だけでぼろぼろと崩れていく。

「な、なんだそれは！なぜこの部屋で魔法が使える！？」

《俺が知ったことが。それに今から死ぬ奴に必要なないことだ。》

「ヒッ！わ、私がこんなところで終わるものか！食らえ魔法の射  
手！連弾・闇の10矢！！」

男はこの部屋で俺が魔法を使ってキマイラを倒したことに驚き放心していたが、鈍重な足音を鳴らしながら近づくと正気に戻り、俺に向かつて魔法を放った。

その全てが命中し、部屋の中が煙に包まれる。

「はあ、はあ、はあ、やった！あははははは！！やったぞ！油断しているからだ馬鹿m《ふんっ！》ぶぎゃっ！」

《その程度の魔法が今の俺に通用するか。》

自分の魔法がすべて当たり、勝利を確信して喜んでいた男に問答無用の一撃をぶち込んだ。男はその一撃をもらい、吹き飛んだところでピクリともせず倒れ込んだ。

男が起き上がってこないことを確認すると、俺はそれまで張り詰めていた気を緩めた。

ちなみに、俺がなぜ無事だったかという点、とっさに「翡翠」で氷の盾を造りそれで向けられた魔法のすべてを凌いでいたからだ。そんなことせずとも大丈夫だったかもしれないが、後ろにそらすわけにはいかないので念には念を、だ。

「さ、寒いよ。奏お兄さん、次からはもうちょっと場所を考えて使つてよ。」

「あ、ありいちゃんの…言うとおりです。」

閉鎖された空間で「翡翠」を使ったせいだろう。部屋の気温は著しく下がり、防寒対策をしていなかった二人は齒をガチガチ鳴らしながら俺に文句を言ってくる。

俺自身は気温の変化など物ともしないから、つつい周りの影響を

考えずに行動してしまった。

《あ、スマンスマン。ついカッとなってやっちゃったぜ。反省はしている。後悔はしていない。》

「またそんなエヴァちゃんがわからないネタを…ところでその人、本当に殺しちゃったの？」

二人に笑いかけ、ネタをこめながら謝罪すると、アリイから溜息混じりのツツコミがきた。

吹き飛んだ男を見て恐る恐る生死を確認する。

どうやら、一緒にいる間で俺が怒ることはほとんどなく、殺生も必要最低限しかしないのブチ切れていたので不安になったのだろう。

《いや、ああは言ったがギリギリで死んでないと思うぞ。こんな奴、殺すのも面倒くさい。》

「この人、どうするんですか？そのまま捕まえて突き出すわけにもいきませんし…」

その通りなのだ、まさか『この魔法使いの仕業です。』とか言うわけにもいかない。言ってしまうえばこいつは即刻、火あぶりの計に処されるだろうが、こいつを捕まえたことについて事情聴取がされるかもしれない。

それにこいつに俺たちのことをばらされてしまうと面倒なことになりかねない。

ああ、依頼主にどう報告したものか…本当に面倒くさい。

《どうするアリイ？》

「そうだね。エヴァちゃんの忘却術の練習台にしようか？頭をぱあにすれば周りに被害は出ないだろうし、エヴァちゃんの魔法の練習にもなるよね。」

《じゃあ、その方向で。》

「て、適当ですね。（汗）」

考えるのが面倒くさくなり、アリイに丸投げしたのだが、以外と言い案がかえってきた。

ここで始末する選択もあるのだが、こんな三下のために二人の手を汚させるのも、自分の手を汚すのも腹立たしい。

《そんなもんでいいのさ。さて、危険も去ったし、本格的なここの調査をするか。二人は上に行つて、晩飯の準備と、そいつを魔法で縛つといてくれ。ついでに頭がぱあになる魔法も。》

「わかった。早い目に上がってきてね。」

「先にいつてますね。」

《あいよ。》

男を担いだ二人は、俺に声をかけながら地上へと移動し始める。二人がいなくなった後、この部屋に残された俺は小さく溜息をついた。

《…さてと、この先の部屋がどんなことになってることやら…。》

俺はこれから全部、一人でしなければいけないと思うと陰鬱になったが、この部屋以外もどうなってるかはこの部屋の主を考えれば想

像に難しくない。

そんな部屋に二人をつれて調べるのは情操教育上よくないので連れて行きたくない。そこまで考えると『仕方ないか』と割り切ることにして、部屋の隅々まで調べるべく作業を開始した。

~~~~~

小話

《ただいまー。 なにかあったか？》

「おかえり」。特に何もなかったよ。」

「おかえりなさいです。 はい。 こちらの“処理”も終わりました。」

「あははあはあはははは。」

《…みたいだな。 完璧にイツちゃってるもんな。》

「ところで、どうだった？」

《…そいつが言ってたとおり、生きてる人はいなかったよ。 そのままにしとくのもかわいそうだったから「翡翠」で凍らせて、それ以上遺体が痛まないようにしてきた。》

「そうでしたか…。」

《あと、捕まえられてた動物は裏口から逃がしといたよ。 それと、アリイ。これがこいつの研究内容が書いてると思う資料。》

「はいはい。ふんふん。」

「…どうですか？」

「こいつの研究は合成獣と呪紋の研究をして、目標は不老不死を目指してみたいだね。」

《それでエヴァちゃんのこと調べてたんだな。》

「うん。いろいろな種族を掛け合わせて強靱な体をつくり、その上に呪紋回路を焼き付けることでその能力を強化するみたいだね。そうすることにより、自分の体を改造して不老不死にするつもりだったみたいだよ。」

《呪紋回路か…、それって生身にはかなりの負担になるんじゃないかなったか？》

「その通り、人の身に呪紋回路を刻むのは焼きごてを体に当てるのも同然。元々の限界を引き上げようと外付けの回路を取り付けるんだから…。」

「そうなんだ…。うん？じゃあ物とかにだったらできるの？剣とか盾とか、鎧とか鎧とか鎧とか？」

「うん。どうだろうね？やったことも見たこともないからわからないけど、呪紋回路が人の身に過ぎた物だったのは、水路の設備がされていないところに水を無理矢理流し込むような物だからでしょ？だから無機物に焼き付ける場合だと、人と違って基の強度が違うから、あれ？案外大丈夫なのかも…。」

エンチャント
そうだよ、属性付与された武器つてのもあるし、魔法道具も大雑把に言えば回路を焼き付けるのも同じととれるよね。

だから、人の身に直接焼き付けるんじゃないって、身の回りの物に焼き付ければいいのか。そうすれば無理なく魔法強化ができるのか。いや、けどそうすると焼き付けることによる強度の低下が…ブツブツ…。

実験して数値をとらないと、理想値と現実値とのすり合わせができないからいつまでたっても机上の空論のままだよ！ああ、久々にビビツときたのに…！ん？どうしたのエヴァちゃん？奏お兄さんの方をジツと見て…。

「じー。」

「…じー。」

《あ、あの…。アリイさん？エヴァさん？ナニヲカンガエテルンデス力？》

「そういえば、アリイちゃん。そろそろ。カナデさんのおーばーほーるっていうのをしたいって言うってたよね？」

「言ってたよね。けど、そこじゃあ場所も道具もないから、無理だって言ったんだよね。」

「「じーっ。」」

《ま、まさか俺で実験しようかなとか、お、思ってる？》

「「せ・い・か・い」(はあと)」

《い、いやだー！！そんな不確かなモノを俺を使って検証するなー！？》

「大丈夫だよ。成功すれば能力アップ間違いなしだから。」

《その根拠はどこに！？》

「カナデさん、大丈夫大丈夫ですよ。」

《ヒイイ！？さっきのことを根に持ってた？！》

「というわけで。」

「カナデさん？」

「諦めようか？」

《キイイイヤアアア！！》

~~~~~

## 小話2

「そつえば、あの「翡翠」っていう武装は何なの？」

「おお。よくぞ聞いてくれました！それでは紹介します！僕が造った武装ナンバーNO.3「翡翠」！形態はこれまた同じくガントレット銃手！防御力、攻撃力は「亜鉛華」、「翠晶」の中間ぐらいのバランスタイプだね。」

保有能力は高周波を発して絶対零度に近い極低温を作り出す「凍てつく音色」だよ。」

今回、奏お兄さんはそれを使って相手を凍らせたり、氷の壁を作ってたけど、他には氷の弾を打ち出したり、吹雪を降らせたりすることもできるんだよ！」

「ふええ、アリイちゃんの武装ってどれもすごいのはっかりだね。」

「でしょでしょ。他に質問はある？」

「えーと、武装ナンバーって言ってたけど他にはどんなのがあるの？」

「うーん、そうだね。今までに見たことがあるやつナンバーだけ教えてあげるよ。NO・1「黒鐵」NO・4「翠晶」NO・7「亜鉛華」だよ。」

「え？「黒鐵」？って？私は見たことないと思うんだけど？」

「いやいや。いつもみてるよ。ふふふふ。」

「???」

## 第十話 俺たちの流儀・下。（後書き）

ぴーん

『奏君は二人に魔改造を施された。（成功率40％程度）』  
《アッーーーーー！！》

と言うわけで第十話でした。  
奏君ブチ切れました。はい。奏君は普段はおとなしいんですが、実は激情家だったりします。

小話の題名をつけるなら「エヴァちゃんの逆襲。アライちゃん自重しろ。奏君の自業自得。」に決まりですね。（笑）

武装ナンバーはNO・0～NO・7まであります。∴NO・8はどうしようかな？（14巻的な意味で）

## 第十一話 魔改造とその術後。（前書き）

うわああああ！更新がめちゃくちゃ遅れてしまい、すみません！  
時間が空いたときにちょこちょこ書いてはいるのですが、なかなか  
進まないものです…。

もっと早くかけるようになりたい…。

## 第十一話 魔改造とその術後。

《えぐっ…えぐっ、ごわがっだよー。》

「あ、あの…げ、元気出してくださいね？」

「いやゝ、久しぶりに良い仕事をしたね！やっぱり、作るときは遠慮なくだよゝ！」

《あほか！？その自重のない改造のせいで被害に遭うのは誰だと思うんだ！》

「奏お兄さんかなゝ？」

《わかってるんなら自重しろおおおお！！qあwせdrftgyふじこ1p；@！？》

一仕事を終えた爽やかな笑顔を浮かべながらさらっと言いのけるアリイに文句を言うが、途中から怒りと恐怖が入り交じり、他人には何を言っているのか全くわからないものになった。

俺にいじられたことへの意趣返しで今回の魔改造事件を起こしたエヴァちゃんも流石に同情したのか、おろおろしながら俺を慰めに来ている。

ちなみにこの恐怖の魔改造は悔しいことに（もしくは幸いなことに）、文句のつけようがないくらいに成功している。

しかし、改造途中に

「あっ…。まっ、良いかゝ。」

《良くねえよ！？なに！？何があつたんだ！？》

「なんでもない、なんでもない。」

と何度言いあつたことか…自分がどうなってるかがわからない恐ろしさの言い表せないことの…。

だが、この改造で俺の能力は格段に向上した。何でも、今まで装甲にかけられていた術式と相互に関係し合い、共鳴することで術式の効果をより倍増させているらしい。それと同時に、呪紋回路自身が予備の魔力タンクのな役割を果たしているとか何とか…。そのおかげで俺の総合魔法量と魔法・物理防御力は今までの比にならないほどに増大した。

これまでの俺を戦車と例えるなら、今の俺はさながら移動要塞だ。

アリイはこの新たに強化された装甲を例のごとくアスラクライン関係で、『護法装甲』と名付けた。

今や、俺の能力はアリイの自重のなさのせいで本家のアスラマキーナを凌駕しているとさえ思える。しかし、そのせいで魔力操作はいっそう難しい物へとなった。それもそうだ。今まで自転車に乗っていたのをいきなりレーシング用のバイクに乗せられるようなものだ。また鍛錬を一から仕直すしかないと思つたときはかなり凹んだ…。

「どうどう。奏お兄さん落ち着いて。全く奏お兄さんは落ち着きがないな。」

「ア、アリイちゃん！それは火に油《お前のせいだろおお！？》だ…よ…って遅かつたかあ。」

例のごとく、俺とアリイのこのやりとりは俺が力尽きるまで続けた…。

~~~~~

《ぜえ…ぜえ…》

「だ、大丈夫ですか？」

「それより体の調子はどう？まあ、僕の調整に狂いはないと思うけどね。」

力尽きたため、土下座をしているかのような格好で這い蹲り肩で息をしている俺と、心配して声をかけるエヴァちゃん、自分のした仕事について胸を張って聞いてくるアリイ。

三者三様で不思議な空間が形成されている。

《ぬぐう…。その自信が自惚れといえないのが》

「ふっふっふ。そうでしょう。」

「そうなんですか？」

無駄に自信満々に聞いてくるアリイ。文句の一つでもぶつきたいのだが、文句のつける場所が無く、本気で悔しがる。本来なら表情がわかるはずがないのだが、今の俺を見れば十中八九悔しがっているのがわかるほどである。

また先ほどと同じ問答が始まるのかと辟易していたエヴァちゃんなのだが、アリイの発言を俺がすんなりと受けたことに目を丸くしていた。

《はあ…。悔しいがアリの言うとおりなかなかの仕上がり、いや。完璧と言っても過言では無いかもしれん。駄の調子は今まで以上にしっくりとくるぐらいだ。

その能力は天才と言っても差し支えはない。アリが天才じゃなかったら大概の天才は凡才と言わざるを得なくなるな。》

そうなのだ、今までも十分な反応をしてくれている駄だったが、今回の改造で今まで以上に機敏に反応してくれるようになったのだ。それに、それまで門外漢だった呪紋系統のことに關しても、他人の研究内容を見るだけで理解し、さらには自分特有の技術に昇華したのだ。この理解力の高さや応用の広さを天才と言わなくてなんとする。

「ふええ、カナデさん。アリちゃんのことをべた褒めですね。

《だがしかし！》え？」

《だがしかしだ！普通ブレーキを踏むべきところを素でアクセルを踏んで笑いながら進むような自重なしの天然ぶりと、大事なところでたまにボ力をやるドジなところを何とかしなさい！！》

「ええ。」

《まったく…》

「あは、あははは…」

いつもと違う方向に行くのかと思いきや、結局はいつもと同じ俺たちに苦笑するしかないエヴァちゃんだった。

~~~~~

《新しい躰の慣熟訓練がわりに、久しぶりに俺との組み手するぞ。》

「げっ!？」

「マ、マジですか!？」

この躰がどこまで動けるのかを確かめたいのもあり、久しぶりに俺との組み手することにした。

決して、決して魔改造に対する意趣返しでは無い。ホントウダヨ?

《今回は2対1で魔法でも罫でも何でもありの実践形式だ。ちなみに俺は魔法なし「知覚領域」の使用もなし、武器もなしだ。》

「そ、それならまだ!!!がんばろう!エヴァちゃん!!僕たちで奏お兄さんを倒すんだ!」

「そ、そうですね!体術だけのカナデさんなら二人がかりで何とかできるかも!」

まだ魔力運用が完璧にできていないので、うっかり殺<sup>ヤ</sup>っちゃわないよう...げふんげふん...やっちゃわないように、魔法を使わないと言うと、二人の目に火が灯った。

どうやら、自分に相応の実力がついてきていることに自信を持ち、魔法を使って良いのなら俺に勝てると思っているのだろう。こうして、自分に自信を持つのも、二人が育っていることの証だ。やはり、自分にしろ他人にしろ、成長していることがわかるのは楽しいもの

だ。それが自分が初めて鍛えた子たちで、自分の身内ならなおさらだ。

俺は二人の気に当てられ、訓練というのを度外視にワクワクしてきた。

「打倒！奏お兄さん！！（カナデさん！！）」

《その意気や良し！かかってこい！！》

二人も目の中に強い意志を宿し、俺を見つめる。俺も目線をぶつけ、吠えるように答える。その時、三人の中に訓練開始のゴングが鳴った。

《ちえすとっ！》

先制の一撃は猛スピードで距離を詰めた俺から始まった。身体強化をかけてないとはいえ、手加減を一切していない右を繰り出す。その一撃に込められた破壊力はまともに当たれば二人の小さな体を砕くことなど容易い。実際に対峙したときの恐怖はすさまじいものだろう。だが、二人はその恐怖にも負けず俺に向かってくる。

「僕でもそれぐらいなら！！デフレクショ風楯！！くううっ！！」

「セブテンデキム・スバサキアスレスリック・ラク・ラ・ラック・ライラック！コエ氷の精霊51柱！！ウンデース・イニクム・コンキダント集いサギタ・マキカ来りて敵を切り裂け！！セリエス・グラキアいきます！！魔法の射手！連弾・氷の59リス矢！！」

アリイが風の魔法障壁を展開し、俺の攻撃を受け止める。次の攻撃がくるまでの少しの時間でエヴァちゃんが魔法を詠唱し、放つてくる。どうやら、遠距離からの攻撃手段を持たないアリイが前衛で、

攻撃魔法を使えるエヴァちゃん後衛をするようだ。

目の前に展開された50を超える氷の矢、それはまるで意志を持っているかのように正確に俺の急所めがけて飛来する。

だが、俺もその程度の攻撃に当たってやるほどお人好しではない。感覚を鋭くとがらせ、向かってくる矢の一つ一つを正確に把握し、狙いをつける。直撃コースにあるものだけを拳で打ち落とす。それ以外は矢の側面に少しの力をかけるだけで弾くなり、当たる瞬間にコロのように腕を回し逸らすなりして対応した。

《攻撃は真っ向から受けるな、逸らせ！教えただろう。コロの原理だ！奇襲をするときに掛け声はかけるな！！魔法詠唱も早く！！》

「はいつ！」

俺が即座に注意をとばす、だがその間にも攻撃の手を止めない。嵐のような怒濤の攻撃がひたすら続けられる。

最初のうちは完璧に避けていた二人だが、時間が経過するにつれ避けるのが紙一重に、時にはかすりながらになってきた。二人も防戦一方でギリギリの現状に焦りが見え始めてきた。そして、この展開を仕切り直すべく、後ろに大きく跳び、距離を開ける。

《すううう…はっ！》

「うっ！まずいつ！エヴァちゃんは私の後ろに！風盾！！デフレクシオ うっうううっ！」

だが、そんなこともかまわず片手に手刀を作り、一気に振り抜く。たったそれだけの動作なのだが衝撃が走り、空気が切り裂かれる。アライが咄嗟に反応し、エヴァちゃんをかばいながら防御魔法を展開するが、その衝撃に負け体勢を崩す。そうしてできた隙を突き追

撃をかける。

《せえええいつ！》

「ッ！そこですっ！！」

だが、二人もそこまで甘くなかった。アリイにかばわれていたからか、さほど体勢を崩していなかったエヴァちゃんが俺の腕をとり、一本背負いのように投げ飛ばす。俺はとばされながらも空中で姿勢を整えて着地する。

《二人とも今のは良い反応だ！！だが！》

そして、着地と同時に弾かれたかのように駆け出しもう一度襲いかかる。

《このまま後手に回っていれば結果は見えてるぞ！》

突撃の勢いに加え、全身の力を乗せた、一切の小細工をいれていないただの左を放つ。だがその攻撃は止めることのできない全力の、渾身の一撃である。

「言われなくても！エレメンタディ・デイス・ディサイ・ディサイプル！大気の精よ！息づく風よ！疾く来りて我が敵より我を守れ！風陣結界！・アエリアーリアウェンティ・スレランデーネート・アデウンデーナフ・イニミキス・メイヌデーフエンダリトメス・アエリアーリス！」

アリイが風の防御魔法を唱えながら、俺の左正拳突きにおなじく右の正拳突きを合わせてきた。だが、魔法障壁を出したとはいえ、まともにぶつかれば体格の差からアリイが吹き飛ばすのは明白である。そう思い、障壁を意にも介さず打ち込んだ。

そこに俺の慢心と油断があつた。

アリイは通常、正面にだす魔法障壁を右腕の側面に斜めにだした、そのおかげで障壁ごと吹き飛ばすはずの俺の拳がその上を滑り、攻撃の届かない懐に入り込まれた。

予想外の出来事に俺の反応がほんの数瞬遅れる。そして、二人はその遅れを見逃さず攻勢へと回る。

《ぬうつ！》

「今だ！光よ！」  
ルークス

「魔法の射手！氷の3矢！」  
サギタ・マギカ  
セリエス・グラキアリス

《ぐわっ！目潰しか！》

アリイの手から閃光があふれ、無防備に食らった俺の目はその光で焼き尽くされる。それと同時に、エヴァちゃんが無詠唱ではなつた氷の矢が足下に着弾し、その周囲を凍り付け、俺の動きを封じる。おまけに、いつの間にかアリイに簡単な幻術をかけられたようだ。そこらかしらからエヴァちゃんの声と魔力反応がする。これじゃあ聴覚に頼った位置特定も、魔力探査もできない。

《（いきなりの大技は狙わず、確実に弱らせてから仕留めにくることにしてみたいだな。となれば、この次は…）》

「もらいました！！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！来  
ニアント・スピーリトウス  
たれ氷精！」  
ウェ

《ぐっ！（こいつは！まともに当たるとやばい！せめてどちらから来るかがわかれば…）》

俺の読みどおり、エヴァちゃんが使えるまでの最強の魔法を詠唱している。

だが、読めていても避けられなければ意味がない。来る方向さえわかれば防御できるかもしれないのだが、それも今では難しい。

グラキアーレス・タナトス・グスラ・テ・セクト・ニ・テン・ベ・タ・イ・ス  
ニ・ウィス・テン・ベ・ス・タ・イス・オ・フ・ス・ク・ラ・ンス  
「闇の精霊を従え吹雪け常夜の氷雪！闇の吹雪！！」

《っ！》

黒の嵐が世界を塗りつぶしながら吹き荒れ、俺がいた場所を噴煙をまき散らしながら吹き飛ばした。

「やつ、やった！勝った！！」

「はい！初勝利！！あの状態で避けれてるはずが…」

先ほどの魔法の影響で未だに一帯の煙が晴れないのだが、二人は今までにない確かな手応えを感じ、勝利を確信した。

《甘い。例え仕留めた後であっても気を抜かない。》

だが、その確信は打ち砕かれる。

「えっ！？」

二人の後ろから声をかけられ、驚きながら振り向くと、そこには左肩から左顔にかけて凍り付いている俺がいて、その両手は二人の頭の上に置かれた。

《ふう〜。今日はここまで！ありがとうございます。》

「「ありがとうございます。」」

これにて今回の組み手は終了した。

~~~~~

「あ〜！後もうちょっとで奏お兄さんから一本とれてたのに〜！」

「うう〜。ほんとです。ギリギリだったのが余計に悔しいです！」

組み手が終わったあと、二人は地団駄を踏みながら悔しそうに大声を上げる。今回ほどギリギリの勝負はなかっただけに、本当に悔しがる二人にフォローを入れる。

《まあ、実際かなりやばかったからな。なかなか見事だったよ。アリイは教えてもない「白刃流し」をするし、エヴァちゃんはいつの間にかに高威力の魔法を覚えてるし。最後のはどこから来るかわからなければやばかったかな？》

「「白刃流し」？」

「そうですよ！どこから来るかわからないように目潰しまでしたのに…どうしてわかったんですか！？」

俺のフォローに各々が食いついてくる。あまりの食いつきの良さに苦笑しながら、それぞれの疑問に答えることにした。

《まあまあ、順番にな？まずアライが使った「白刃流し」ってのは元々、対武器戦の技でな。振り下ろされた刃の側面に、内側にねじりきった拳を入れて、一気にねじり上げる。その時の筋肉のパンプと螺旋の力で最小、かつ最速の払いと突きを瞬時に行う攻防一体になっている技だ。

要するに、強烈なコークスクリューブローで攻撃をはじきながら相手に一発食らわすってことだ。

本来、アライが俺に対して使うには威力が足りないはずだが、同時に使っていた防御系の魔法のおかげで擬似的に成功させることができたんだろ。》

「おおー！いつの間にか私も必殺技を手に入れたんだね！」

必殺技という言葉の響きがお気に召したのか、先ほどとは打って変わって目を輝かせながら喜ぶアライだった。

《そういうこと。次にエヴァちゃんの質問だが、今回はエヴァちゃんに否は一切無い。魔法で俺の足を凍らせての足止め、幻術を使った自身の居場所の隠蔽、俺も直撃すると思ってたよ。

これを避けたのは最近俺に身についた特殊能力のおかげだと思う。

》

「特殊能力？」

「何それ？僕、そんなの初めて聞いたよ？」

今度はエヴァちゃんの疑問に答えると、二人は眉をしかめながら聞き返してきた。

《すまん。言おう言おうと思ってついつい機会を逃してな。》

「良いけどどんなの？」

《ああ。たぶん「未来予知」だと思う。まだ自分で自由に発揮できるものじゃないんだが、追い詰められたときとか、戦いの最中に気が高ぶつてるときに『どこから、どんな攻撃がくる。』ってのが漠然とわかるんだよ。

それで今回も方向とタイミングがわかってな？咄嗟に地面を砕いて下に避けたんだ。》

「ずるいです！～！そんなの使われたら勝てるわけ無いじゃないですか！～！」

《ごめんごめん。まさか今回発動するとは思わなかったんだ。》

その能力の内容を聞くとエヴァちゃんが不満の声を上げた。たしかにそんな能力を使われては勝てる勝負も勝てないだろう。

ははは、と苦笑しながら謝ってみるが、その程度で機嫌は直つてくれないようだ。頬を膨らませながらポカポカと俺を叩きにくる。

そんなほのぼのとした空間の中、アリイは真剣な顔をしながら手を顎に当て、思案をめぐらしている。

「…その能力に気づいたのはいつからなの？」

《細かくはわからんが…おそらく、この軀になってからだだろうな…。山羊頭とかジードと戦った時にも似たような感覚があったからな。》

「……まさか……いやけど……」

《どうしたんだアリイ？こいつに心当たりがあるのか？》

どうやら、アリイにはこの能力の原因に心当たりがあるようだ。

「うん。確証はないけど当たりはついてるよ。ずばり、奏お兄さんがこちらに来たのが理由だろうね。」

《またあれか？いつまでもしつこいな。》

「え〜と、どういふことなんですか？全くわからないんですけど…？」

俺はアリイの言葉に脱力した。この世界に来てもう何年もたつのに、未だ俺に関係してくるこの実験に鬱陶しさを感じずにはいられない。

「ごめんね。エヴァちゃん後で説明するから今は聞き流す程度にしてください。」

「…はい。」

一人だけ話しについて来れないでいるエヴァちゃんがアリイに質問するのだが、今は話を先に進めたいというアリイの言葉にしょぼくれてしまった。

「奏お兄さんがこの世界に来ることになった原因、『「平行世界」の観測もしくは移動』の実験がその能力の原因でもあるんだと思うよ。」

この世界に似ている「平行世界」だけに限定しても、その数は無数、無限にあるものなんだ。そして、それぞれの世界の流れは一樣のものではないんだよ。その中の時間の進みが早い世界を無意識に覗い

てこの世界と重ね合わせることで擬似的な近未来予知を可能にするんだと思う。」

《なるほど。しかし、なんでまたそんなのが？》

「さあ？」「平行世界」を移動した人がみんなその能力を持つのか、それとも奏お兄さんだけの能力なのかはわからないよ。だって前例は奏お兄さんだけ、他に比べる対象が無いから普通の^{ノーマル}か異常^{アフノーマル}かは調べようがないんだね。」

どちらにしても情報が少なすぎるというわけだ。結局のところ能力の原因がわかっただけで、使い方も何もわからなかったので特に意味はなかった。そう思い、溜息をついてどうしたものかと思案に暮れてしまった。

「あ、それじゃあ今度はエヴァちゃんだね。説明するよ。」

「えっ？えっ？」

アライが気づいたように言うと、今度はエヴァちゃんへの説明が始まった。

この後、エヴァちゃんへの説明は数時間続けられ、終わる頃には日付が変わっていた。また、説明を受けていたエヴァちゃんも耳から煙が立ち、しばらくの間行動不能になってしまった。

第十一話 魔改造とその術後。（後書き）

奏君魔改造計画により、戦闘力が大幅にアップしました。
良かったネ！奏君！

久々の（？）用語・補足説明

「未来予知」

大体は本文に書いているとおり、ただし完璧な未来予知はできない。
なぜなら、奏君の未来予知は「平行世界」があるということが前提
条件だから。

つまりは『完璧な未来予知』 〃 『未来が一つしかない』ということ
を世界に押しつけてしまうことになり、「平行世界」が無数にある
ということの否定に成るから。

このことから奏君の能力はかなり精度の高い勘といったところ。「
未来予知」よりも「未来予報」の方がニュアンス的には正しいかも
しれない。

また、見れる未来は数秒先の未来だけである。それ以上は頭の処理
速度がついてこない。

参考は「破壊魔定光」の主人公、椿 定光より。

（破壊魔かつこいいよ破壊魔）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3749j/>

それゆけ黒騎士クン

2010年10月13日13時19分発行